め、親の爲めをのみ思へばよい。同時に、家の爲め、身の爲めを思つて左顧右眄し、毀譽褒貶、利害得失、或ひは、子孫の計などと、一つの心一つの身を、三つにも五つにも使ひ別けやうとする。皆、私心の爲である。その人、眞の忠臣ではなく、眞の孝子ではない。

即ち、誠の人ではない。誠は、眞實無妄である。君の爲めなら君の爲め、親の爲めなら親の爲め、一途にその事のみを思つて、復た他を顧みないのが、誠である。勿論、私の心はない。

天正十六年三月、豊臣秀吉は、小田原を征せんとして、京都を發し、關東に向ふの途次、岡崎城へ入つた。城將重次は、迎へにも出ず、謁見にも及ばなかつた。秀吉は、加藤光康を使ひとして、三度迄召した。けれど、重次は、

『關白に見參しても、別に申し上げることはござらぬ。御免を蒙むりたい。』と答へて、終に顔を見せなかつた。

重次の念頭には、たゞ一人、主人家康が在るばかりで、秀吉の勢力もなく、關白の威望もなかつた。主人家康の爲めを思ふ以外、有力者の思惑や一身の利害などには、一切、顧慮する所がなかつた。

所詮、誠の人であつたのである。

而も、この事、併せて、その心を用ふるの、如何に簡易簡單であつたかを想ふことが出來る。重次は、簡易生活に徹底してゐた。

四の十四　斧鉞を迎へて敢へて諫め鼎鑊に據りて言を盡す（抱朴子）

子路が、君に事へる道を問うた時、孔子は、

欺くこと勿れ。而して、これを犯せ。

と敎へた。世間、主人を欺かない家來はない。巧言令色、媚びを献じ諛ひを進めるのも、亦た、欺くのである。「欺くこと勿れ。」——この事易きに似て、實は難い。

欺かないこと、既に難い。顏を犯して、諫めるに至つては、至難中の至難である。

同月二十日、秀吉は、進んで駿府城に入つた。家康は、大久保の陣から來て、これに謁し、次室に退いて、從征の諸將と會した。所へ、重次がやつて來て、家康の背ろから、

『いやはや、殿には、奇怪な事をされるものぢや。國主たる者が、城を

開けて人に貸す法はあるまい。こんな風では、人の望み次第、北の方でも貸されるぢやらう。呆れてしまふ。』と罵りながら立ち去つた。諸將は顏見合せて微笑した。

家康は、諸將に向つて、

『あれは、本多作右衞門といふ者で、某の舊臣でござる。某幼少の頃から、屢ば、軍に從つた者故、某も、不便に存じてをります。然るに、至つて頑固な、我が儘な生れつきで、それが、年を老るに連れて、益す甚だしく、實に閉口致す。衆人の中でさへ、今の通りでござる。平日の事をお察し下されよ。』といつた。諸將は、

『老人の名は、豫々、承はつてをりまする。今始めて、見申した。忠義な御家來を持たれたわけで、嘸、賴もしい事でござりませう。』と、且

つ祝し、且つ美んだ。

重次が、至難中の至難事を、鮮かにやつて除ける有様は、毎々、斯くの如くであつた。

抑も、何に依つて、然るを得たか。畢竟、私心がなかつたのである。私を顧みる心がなかつたのである。家を思はず、身を思はず、自分の有するすべてを捧げ盡す一片の至誠から、能く彼れの如きを得たのである。私心があつては、「斧鉞を迎へて、敢へて諫め、鼎鑊に據りて、言を盡す」ことは出來ぬ。却つて、君を欺くこと、必定である。

四の十五　艱難に會して始めて眞の朋友は判る　（シセロ）

必らずしも、朋友といはぬ。人情の厚薄は、平素無事の際には判らな

いで、事あるに及んで、始めて明瞭する。眞に親切な者は、何時如何なる場合にも、親切である。輕薄の徒は、何か困難に出遇ひでもすると、自分だけ、助からうとかゝり、主人を捨て、朋友を措いて、逃げてしまふ。

小田原四萬五千石の城主大久保七郎右衛門尉忠世は、彦左衛門忠敎の兄である。天正二年、乾城を攻めた時、部下なる杉浦久藏久勝が負傷すると、急ぎ、馬を下りて、

『この馬に乘つて、早々、立ち退け。』と告げた。久藏は、

『倥偬た馬の下りどころではある。手前などは、幾人討たれやうとも、事に大害はありませぬ。手前は、決して、乘りますまい。』と答へた。忠世は、

『禮儀は、時による。早く早く……』と急き立てた。久藏は、

『大將を捨て殺して、自分一人、逃げられますものか。』と、頑固にいひ張り、動かなかつた。忠世は、

『それなら、馬を捨てるぞ。』とばかり、その塲を去つた。

その後へ、兒玉甚内といふが、馳せ着けて、

『七郎右衞門は、最早退かれたから……』と、强ひて久藏を馬に打ち乘せ、やがて、忠世に追ひついた。

戰塲、敵を前にして、一つ違へば、忽ち命を失ふべき危急の際にも、尙ほ且つ、主從、互ひに相捨てかねた、忠世、久藏の如きは、眞に情誼の深い者といつてよい。輕薄漢には能ふべくもない。

四の十六　聖主は賢臣を以て寶と爲し珠玉を以て寶と爲さず（鹽鐵論）

人主の以て恃みとする所は、獨りその臣下があるのみである。臣下を愛することの深淺如何によつて、人主の明闇、賢愚は判る。

忠世は、平生、儉約を重んじ、衣服は勿論、甲冑の如きすら、破れなければ、新たに造ることをしなかつた。且つ、毎月、食を絶つこと七日これを七不食といつた。徒らに金穀を吝しんだのではない。以て、士を招き養つたのである。これに仕へる者、最初の程は、その卑吝を誘つたけれど、居ること數年、皆、父子の親を結び、忠世の死んだ時には、一人として涙を流さぬはなかつたといふ。

食を絶つて迄も、士を養ふ——これが、聖主の心持ちである。

四の十七　勇力世を振はしてこれを守るに怯を以てす

（孔子家語）

智は、これを守るに愚を以てして、その智を見はさない。功は、これを守るに讓を以てして、その功に伐らない。富は、これを守るに謙を以てして、その富に誇らない。勇は、これを守るに怯を以てして、その勇を示さない。所謂る、

能ある鷹は、爪を隱す。（和諺）

ものので、身を保ち、家を護るの道、この外にはない。

小田原の役後、豊臣秀吉は、諸將を會して、

『會津は、東北の樞要ぢや。智勇、俊秀の將を擇んで、鎮壓せにやならぬ。』と語り、遂に、蒲生氏郷を擧げて、會津二百十萬石に封じた。

時に、氏郷は、封命を拜して退き、廣間の柱に倚りかゝつた儘、涙ぐんでゐた。山崎右近といふが、傍へ寄つて、

『大封をお受けなされ、忝く思召すのも、御道理でござりまする。』といふと、氏郷は、小聲になつて、

『否、そんなことではない。縱ひ小身でも、都近くにをることなら、天下に望みがないではない。自分は、今、遠國へ棄てられた。それを思へば、つひ、不覺の涙がこぼれる。』といつた。

氏郷は、當時の武將中、最も優れた者の一人であつた。然ればこそ、秀吉も、特に擇んで、東北の重鎮としたのである。たゞ、その智勇を守

るの術を知らず、却つてこれを露骨にした。右近に語るに、彼れの如き言をしたなどは、餘りに輕々しい。これ、他日、秀吉の疑ふ所となり、鴆殺の不幸に會した所以である。

四の十八　士は己れを知る者の爲めに死す　（史記）

人は、感情の動物である。他人の知己に感じては、啻に、利害を超越するのみならず、更に死生をさへ超越して、二つとない命を捨てる。

松倉權助といふは、筒井順慶の家に在つて、臆病者と沙汰せらるゝ事の口惜しさに、去つて蒲生家を訪ひ、

『臆病者も、良將の下に使はれる道がござりましたら、御扶持を賜はりたく存じまする。』と請うた。氏郷は、

『見る所がある。』といつて、これを採用し、祿二千石を與へ、物頭とした。

その後ちの戰ひに、權助の働き、敵味方を驚かしたが、餘り深入りした爲めに、不幸、討死を遂けた。

蓋し、氏郷知己の恩に報ひたのである。

四の十九　眞實は勇氣の源である　（センダー）

眞實の反對は、虚僞である。虚僞は、大概、私慾から來る。私慾の熾んな者は、事に臨んで、一身一家の利害を顧みるが爲めに、踏み込んでの勇戰に堪へない。踏み込んでの勇戰は、たゞ眞實なる人——誠の人の事である。

松田金七秀宣は、大和の士である。人と爭つて打擲せられ、憤然として死を決したのを、人が留めると、爾來、鎧の背に、金箔で「天下一の卑怯者」と大書した。

後ち、蒲生家へ來て、自ら天下一の卑怯者と名乘り、仕へを求めた。

氏郷は、

『既往の失敗を蓋はず、正直を好む所、これ、一つの力ぢや。尋常の者ではあるまい。』といつて、祿を與へ、鐵砲頭に採用した。果然、毎戰、無二の剛强を顯はし、眞實、即ち、勇氣の源であることを實證した。

四の二十　英雄でなければ英雄を知ることは出來ない（ゲーテ）

英雄の志は、天下に在る。撥亂反正、以て、世の治平を致す、これ英雄の本領とする所である。禮儀、作法の末に拘々たるが如きは、その屑しとする所でなければ、粗野の謗りもあらう、「禮に囚はず」の非難もあらう。非難する者自身が、憐れむべき小丈夫なるが爲めに、英雄の英雄たる所以を解し得ないのである。

佐久間久右衞門安次が、初めて氏郷に謁した時、疊の緣に躓いて、ばつたりと倒れた。小姓等は、顏見合せて冷笑した。それと看て取つた氏郷は、

『久右衞門は、疊の上の奉公人ではないぞ。』と叱りつけた。小姓等は、一と縮みに縮み上つた。

然り、安次は、英雄であつたのである。

四の廿一　質朴は英雄の本色である　（マコーレー）

小人は、左右、外見を飾りたがる。服装を飾り、住居を飾り、容貌を飾り、態度を飾り、言語を飾り、動作を飾り、一顰一笑に至る迄、祭禮に曳き出す山車の如くに飾り飾つて、愚人の喝采を博さうとする。宛然として、俳優である。

けれど、「質朴は、英雄の本色である。」山から伐り出したばかりの材木のやうに、生地の儘、皮つきの儘、斧削、文飾を施さないのが、質朴である。

氏郷は、或る時、諸士を饗應するのに、手が足りなかつたのでもあらうか、自身、頭を包んで、風呂の火を焚いたとか。何等の質朴！　而も

此邊にこそ英雄の英雄たる本色があるのである。外飾者流の知ることではない。

四の廿二　身を以て率ゐる　（和諺）

人を率ゐるには、身を以て率ゐるのでなければならぬ。

氏郷は、常に、諸隊將を誡しめて、

『戰場で士卒を使ふ場合、自分は背ろにをつて、口先でばかり、かゝれかゝれといつたとて、決してかゝるものではない。大將自ら、先へ進み出て、こゝ迄來れ、といふ風にすれば、大將を見捨てる者はないものぢや。』といつた。

古人の句に、

人起す、人は巨燵に、朝寝かな。

成程、これでは仕方があるまい。

四の廿三　恩を知らざる者は鬼畜の如し　（和諺）

成功者の通弊は、昔を忘れるに在る。昔を忘れるにも色々ある。昔の恩人を忘れるに至つて、こゝに人間の不徳は極まる。世の成功者中、果して、この不徳を敢へてしない者があるか。

『自分は、昔し、誰某の恩を受けた。』といふことを口にする者は滅多にない。大概は、曾つて何人の恩を受けた事もないやうな顔をしてゐる。昔の恩人に逢ふことをも好まない。逢へば、何か自己の估券を落しでもするやうに感ずるらしい。

零落した昔の恩人に對しては、殊に冷淡である。なるべく逢はないやうにし、偶ま逢へば、これを侮つてかゝる。忘恩、厭ふべしであるが、如何せん、これが成功者の通弊である。

氏郷は、元と、近江佐々木氏の臣である。主人承禎の城を致して去るに及び、父賢秀に從つて、織田信長に仕へ、信長亡びて、更に豊臣秀吉に仕へ、戰功を以て、會津百二十萬石に封ぜられた。

氏郷、或る時、伏見に在つて、秀吉に謁すると、舊主人承禎の子の四郎といふが、伽の者として、秀吉に仕へ、祿二百石を給せられてゐた。氏郷は、一見、惻隱の情に堪へず、四郎が起つと、大諸侯たる身分を忘れたものゝやうに、刀を捧げて、これに陪從した。

何等の厚情！　何等の高誼！　今の成功者輩の及ぶ所でないは勿論、

又た、凡人の及ぶ所でない。否、恐らく、古人の中にも、その比を見ないであらう。

が、功成つて、昔の恩人を忘れるのは、人間不德の極である。氏鄉の事を、たゞ、非常の人の非常の擧とのみ視て已むのは、志がないのである。今の成功者たる者、鑑みなければならぬ。

四の廿四　始めを愼しみ終りを慮かる　（貝原益軒）

向ふ見ずに事をすれば、後ち、必らず悔ひがある。宜しく、事の始めに於て、その終る所、歸着する所を洞察し、これに處するの用意があるべきである。

三州吉田城主酒井左衞門尉忠次は、智謀を以て、主人家康の信任を受

けた人である。長篠の役に、織田信長が、武田勝賴に打ち勝つたのも、忠次の献策に依る點が多かつた。役後、信長は、忠次の功を賞して

『汝は、前に眼があるのみならず、後ろにも眼がある。』といつたとか。

前に眼があるのは、普通である。後ろに眼のある者は少い。十中の八九迄が、事後の處置に當惑して、商人などには、夜逃げをする者さへあるとか。

四の廿五　井の内の蛙大海を知らず　（和讃）

當眼の小問題に沒頭して、高處、大處から事を判斷するの用意を缺く者は、所謂る井の内の蛙である。

天正二十二年、毛利元就は、故主大内義隆の爲めに、逆臣陶晴賢を

計ぜんとして、計を諸子、一門に諮うた。仲子小早川隆景、十九歳、進んで曰く、

『私の宿意を以て、兵を動かすのは、宜しくありませぬ。天朝に請うて、大義に依つて、お討ちなされませ。人心の嚮ふ所、勝利は、此方のものでございまする。』と建議した。元就は、

『善し！』と應じ、早速、その運びをした。後ち二年、果して嚴島の捷ちがあつた。

當時の諸侯伯は、日夜、攻伐を事とし、これに沒頭して、殆んど朝廷のある事を知らないものの如くであつた。大義に依つて戰ふなどは、その思ひも寄らない所で、彼等は、滔々として井の内の蛙である。斯かる際、隆景に彼の論があつたのは、驚嘆するに足る。所謂る、高處、大處

から事を判斷するの用意があつたので、識見の高さ、確かに群雄を拔いてゐた。

今の政治家は如何？　彼等は、頻りに國政を論ずる。その論ずる所が甚はだ事務的で、そして地方的であるのを見ると、彼等も亦た、高處、大處から事を判斷するの用意を缺いてゐるのである。井の内の蛙連中たるを免れない。

四の廿六　面從腹非（和　諺）

精神の修養といふ。要は、誠の人となるに在つて、誠の修行は、身、口、意三業の一致から着手する。行ひと言葉と心との三つを一致させる所から入つて行く。

三業一致の事、易きに似て、實は難い。例へば、「面從腹非」——面で從つて、心で非る、といふが如き、三業が一致しないのであるが、世間の父子、兄弟、夫婦、主從、師弟、長幼などの間に於ける服從關係は大概は、この面從腹非である。

隆景はいつた、

『人の異見を聞いて、直ぐに承服する者に、長持のするのはない。』と。親の意見を聞く道樂息子など、皆これで、亦た一種の面從腹非である。以て、三業一致の難いことが解る。勉めなければならぬ。

四の廿七　山中の賊を破るは易く心中の賊を破るは難し　（王陽明）

人の心中には、賊が棲んでゐる。名譽、金錢、衣食住などの物慾、嗜慾は、皆、心中の賊である。人は、物慾、嗜慾に從ふの樂しいことを知つて、その恐るべき賊であることを知らず、爲めに家を失ひ、身を亡すに至る者もある。

隆景が、平生、少壯の士に向つて、

『自分の心に合つた事は、すべて、身の毒と思ふがよい。又た、難かしく感ずる事は、皆、藥ぢやと思へ。』といつたのは、これを誡しめたに外ならぬ。これを戒しめよ、これを戒しめよ。

四の廿八　愚者の一得智者の一失　（和諺）

愚者にも、一得がある。智者にも、一失がある。

隆景が、當時の智者黒田孝高に告げた言葉に、

『貴殿は、事を決斷して後ち、後悔されることがあらう。才智に任せて充分、思慮を盡されぬからぢや。』とあつた。これ、智者の一失である。

『吾等の才は、甚はだ鈍い。分別に分別を加へ、思慮のありたけを盡して、漸く、判斷がつく。その代り、後悔が少い。』——これ、愚者の一得である。

こゝに至つて、智者が愚か、愚者が智か。智者は、自ら戒しめなければならぬ。愚者は、必らずしも憂ふるを要せぬ。

四の廿九　心誠にしてこれを求むれば中らずと雖も遠からず（大學）

何事も、專ら相手の爲めを思ふ仁愛の至情——誠を以てすれば、大体に於て、間違ひはない。左右、誠である。思慮、分別、利巧、才覺などは、多くいふに足らぬ。

隆景は、分別者として知られた人である。嘗つて、黒田長政から、分別の肝要を問はれると、

『分別の肝要は、仁愛でござる。萬事、仁愛を本として分別すれば、理に中らずとも、遠くはござらぬ。仁愛のない分別は、如何に利巧な分別でも、すべて僻事と承知せられよ。』と答へた。

然り、誠のない分別は、結局の無分別である。誠のない利巧は、畢竟の馬鹿である。今の世、誠のない利巧者が多い。戒しめなければならぬ。

四の三十　約束と履行とは別事である　（英國俚諺）

必らずしも、惡意があつての事ではない。たゞ、輕々しくいひ、輕々しく人と約束するが爲めに、心ならずも、嘘吐きとなり、違約者となる場合がある。何事も、愼しまなければならぬ。言語、最も愼しまなければならぬ。篤く愼しみ、深く分別して、然る後ち、口を開けば、庶幾くは、嘘吐きたり、違約者たることを免れ得るであらう。

隆景は、平生、信義を重んじ、一旦口外した事は、再び變更しなかつたといふ。黑田長政に語つた言葉に、

『分別は、久しく思案して、遲く決斷するが宜しい。』とあつた位ゐで、その人、非常に愼み深く、一言一行、決して輕々しくしなかつたればこそ思はれる。鑑みなければならぬ。

不殺生—世の中に生きとし生けるものは皆、たゞ玉の緒の長かれとこそ
不偸盗—山守の許さぬ程は谷蔭に、落ちたる栗も拾はざるべし。
不邪淫—女郎花匂ふ邊りは心せよ、色香に道を忘れもぞする。
不綺語—雲鳥の綾織りなしていひ立つる、言に誠は少かりけり。
不妄語—僞はりて活けらんよりは白露と、身は潔よく消えも果てなん。
不惡口—我が宿に養ひ置ける犬だにも、打ち罵りて責めじとぞ思ふ。
不瞋恚—塵ばかり怒らで忍べ忍びてぞ、山より高く德は積らん。
不邪見—身に影の離れぬが如善惡の、業に報ひのなかるべしやは。
不兩舌—とにかくに惡しくいひもて葦垣の、中を隔つることぞ賤しき。
不貪慾—咲くを待ち散るをば惜む苦みは、花掘り植ゑし咎とこそ知れ。

（僧月照）

五の一　過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し　（孔子）

過ぎるのも惡い。及ばぬのも惡い。一切萬事、善は、たゞ中庸に在るのである。

隆景は、晩年、三原へ退隱した。或る日、林吉兵衞入道梅林といふが京都より御機嫌伺ひに來て、

面白の春雨や、花の散らぬ程降れ。

といふ、當時流行の小唄を示した。隆景は、歌はせて聞き、

面白の儒學や、武備の廢らぬ程。
面白の武道や、文學を忘れぬ程。
面白の酒宴や、本心を失はぬ程。

面白の遊學や、辱を取らぬ程。
面白の好色や、身を亡さぬ程。
面白の利慾や、理義の道塞がらぬ程。
面白の權勢や、他に誇らぬ程。
面白の釋敎や、世理を忘れぬ程。

と書き續け、

『何事も、中の一字を忘れぬ程に、嗜みたいものぢや。諸道の翫び、この一言に盡きる。輝元を始め、家來の者にも、よくよく、この歌の心を會得させたいものぢや。』といつて、梅林に託し、甥の毛利輝元に贈つた。

而も、中庸の守るべきは、獨り、諸道の翫びに於てのみではないのである。

五の二　柳の枝に雪折れなし（和諺）

舌は、齒よりも長持ちする。強いものの破れ易く、堅いものゝ壞れ易いのを見ると、柔弱、これ、處世の最良手段でなければならぬ。

隆景は、奸人と交はつて、その奸に染まず、而も、正面からは爭はないで、常に、弱を以て強を制し、柔を以て剛に勝つた。時人は、これを柳に比したとのことである。

果して然らば、剛强、必らずしも剛强ではなく、柔弱あながちに、柔弱ではない。或る人の歌に、

降る雪に、撓むと見えて、折れぬこそ、

柳の枝の、力なりけれ。

柳の枝にも力はある。而も、この力こそ、何ものにも破壊されない、最剛最強の力であること知らなければならぬ。世には強がり屋が多い、喧嘩好きが多い。

五の三　道を行ふ者天下擧つて毀るも足らずとせず天下擧つて譽むるも足れりとせざるは自ら信ずるの厚きが故なり　（西郷南洲）

自ら信ずるの厚い者は、他人の毀譽、世間の思惑に對して、全然、無頓着である。爲めに喜ぶこともなければ、爲めに憂ふることもない。

豐臣秀吉が、まだ小身でゐた頃の事、主人織田信長に上申して、

『この清洲城は、水に乏しい缺點がございまする。小牧へお移りなされませ。』といつた。信長も、夙にその考へがありながら、故意と怒つて、『猿め、何を知るか。』と叱りつけた。秀吉は、些か懲りる所なく、その後も、氣のついた事があれば、遠慮もなく申し上げ、申し上げる毎に、嚴しく叱りつけられて、而も、一向、平氣でゐた。同僚等は、『あんな鐵面皮な奴は、見たことがない。』と、目引き袖引き、聞えよがしに詆り笑つた。秀吉は、これにも平氣でゐた。

といふのが、自ら信ずることが深かつたのである。以て、鐵面皮の致す所とした同僚等は、哀れにも、盲千人の仲間内であつたと見える。

五の四　千里の道も足下から　（和　諺）

何事も、小を積んで、大に至る。この見易い道理を忘れ、いきなり、大を成さうとして、一生涯、一事を成さずに終る者が多い。

岐阜での一日、織田家の諸士が、互ひに、その志を語り合ひ、或ひは一國一城の主、或ひは天下一握りと、何れ劣らず、大法螺を吹き立てた中に、秀吉は、

『拙者は、千辛萬苦の末に、やつと、三百石を取る身分になつた。この上、切めて三百石も得たいと、日夜、心がけてをる。』といふと、人々はその志の小さいことを笑つた。秀吉は、

『否、自分は、届くことを望むのぢや。届かぬ望みは、痴人の夢と同様で、詮のある事ではない。』とやり返した。

夢を實と思ひ違へて、相場事にかゝる者は、秀吉の言、以て自ら戒しむべきである。

五の五　情けは人の爲めならず　（和諺）

人に情けをかけるのは、單に、その人の爲めではなく、併せて、自分の爲めである。情けをかけられた人は勿論、それを見、それを聞く者も共に感動して、仁者の門下に出ることを望むは必定である。斯くて、得る所の利益は、失ふ所の情けに十倍しやう。情け、決して、人の爲めではない。

秀吉は、主人信長の爲めに、美濃の豪傑、宇留間城主大澤次郎左衞門を降し、清洲へ同道した。信長は、一見、大に喜んで、酒食を與へ、忠勤を勵ました。大澤は、面目を施した。秀吉も、安心して、共々、屋敷

へ引き取つた。

すると、その夜、信長は、窃かに秀吉を召して、

『主人に背いて、予に從つた次郎左衛門ぢや。何れは、予にも反くぢやらう。油斷はならぬ。寧そ、この際、殺した方がよい。』と、意外な事をいひ出した。秀吉は、一驚を吃しながら、

『仰せながら、只今、彼れを殺しましたら、今後、降參する者はござりますまい。先づは、あの儘に差し措かれて、他日、反きましたら、その節、殺す迄でござりまする。』と諫めたが、信長は、固く執つて動かなかつた。

秀吉は、その儘、家に歸ると、丸腰になつて、大澤に逢ひ、

『自分は、御邊の爲めに、懸念に堪へぬ事がある。直ぐ、當地を立ち退いて下されよ。後事は、自分が引き受ける。』と告げた。大澤は、その意を覺り、厚く禮を述べて、清洲を脱走した。傳へ聞いた織田家の士は、何れも、秀吉の高義に感じ、その手に附くことを願ふ者が多かつた。

秀吉は、斯くの如くにして、能く、人心を收攬した。まことに、「情けは、人の爲めならず。」である。

五の六　怒りて日の入る迄に至ること勿れ　（基督）

人間、怒れば、猛獸になる。その行爲の、往々、殘虐に亘り、非道に墮する所以である。人と爭ふ者は、この點、最も戒心を要する。

天正元年、織田信長が、宇治槇島に足利義昭を攻めた時、秀吉は、信長に謁して、

『事後、義昭公の御成行は、如何遊ばされまする。』と伺つた。信長は、『義昭公今度の御企ては、如何にも不當ぢや。天下の爲めに、除き奉るの外はない。自業自得といふものよ。』といつた。秀吉は、三好長慶が逆臣の名を取つたを例に、寛大の處置、然るべきを切言した。信長は、『如何にも！』と頷き、萬事を秀吉の計ひに任せた。

戰ひが終ると、秀吉は、義昭を奉じて、河内國若江なる三好義繼方へ護送した。

一國者の信長も、秀吉の心づけに依つて、猛獸たるに至らなかつた。人は、感情の動物である。時に怒ることを免れない。怒るべくは、猛獸たるに至らない程度に怒りたいものである。

五の七　仁者は敵なし　（孟子）

敵も、自分が造るのである。味方も、自分が造るのである。心がけ次第、昨日の敵を今日の味方として、我が用をさせることも出來る。

であるから、敵、必らずしも、憎むべきではない。敵を敵として、どこどこ迄も、憎み通すのは、狹量の沙汰である。世に處して、大事を成さんと欲する者は、味方を味方として用ふるは勿論、敵をも味方として用ふる程の雅懷と用意とがなくてはならぬ。

天正十年、織田信長が、武田氏を亡した時、秀吉は、毛利氏と戰つて中國に在つたが、勝頼自滅の由を聞くと、

『さてさて、殘念な事をした。自分が、軍中に在つた位ゐなら、信長公

をお諫め申して、勝頼に甲信二國を與へ、關東の先陣をさせるのであつた。すれば、東國は、平押しになるのぢや。』と、數多たび、嘆息した。

秀吉は、敵をも味方として用ひることを知つてゐた。その見る所、世に、一時の敵はあつても、永久の敵はなかつた。斯くて、己れに敵した前田利家を味方とし、德川家康を味方とし、毛利一族を味方とし、長曾我部元親を味方とし、これをして、己れの用を爲さしめて、終に、一統の業を成し遂げた。

これを仁者と見てもよからう。孟子曰く、「仁者は、敵なし。」と。吾等は、秀吉の事に於て、その眞に然ることを思ふ。

五の八　怨みに報ゆるに德を以てせよ　（老子）

雅量は、男子の一美觀である。「怨みに報ゆるに德を以て」するのは雅量の至極せるもの、これに優る美觀はない。

賤ヶ嶽の戰ひに、前田利家は、柴田勝家に味方して、一砦を守つた。勝家の敗れて北庄へ亡ぐるに及び、利家も、退いて府中の城へ入つた。

間もなく、秀吉が、やつて來た。僅かに小姓一人を召し具して、城門に至り、

『又左、又左、秀吉ぢや。對面致さう。』といひ入れると、利家は、驚きながら出迎へて、

『まことに以て、面目次第もござらぬ。この上は、潔く切腹して、お詫び申さう。』と、恐縮顏にいつた。秀吉は、聞きも敢へず、

『他人がましい申されやうではある。御邊と某との交りは、一朝夕の

事ではない。敵となり、味方となるのも、浮世の義理で士の常とする所ぢや。御邊も、秀吉に對して、何の怨みもござるまい。某とても、その通りでござる。』と慰め、共々、北庄へ向つた。

この事があつて、利家は、深く秀吉の交誼に感じ、永く、その腹心となつた。

欽すべきかな、「怨みに報ゆるに德を以て」した秀吉の雅懷！　秀吉豪傑と雖も、一個の成り上り者に過ぎぬ。信長や家康などのやうに、力と恃む譜代の臣があつたわけではない。而も、能く、天下を一統するに至つたのは、這般の雅懷があつて、人心を收攬し、敵をも味方としたからである。世の偏狹者流の如き、果して何事をか成さんとする？

五の九　戰はずして人の兵を屈す　（孫子）

戰つて勝つのは、普通の事である。戰ふの損害が、往々、勝つの利益に增ることを恐れる。且つ、成功も遲い。善く戰ふ者が、「戰はずして、人の兵を屈す」ることを要とする所以である。

長湫の役後、秀吉は、羽柴下總守雄利を使ひとして、德川家康へ和睦を申し込んだ。折柄、放鷹に出てゐた家康は、その場へ雄利を案内させて、

『織田信雄の腰拔けに賴まれて、加勢致し、今更、殘念に存ずる。この上は、筑前守と一戰の覺悟ぢやから、然やうに申し傳へられよ。』と拒絕した。雄利は、歸つて、斯くと復命した。

時に、秀吉は、髪を洗はせてゐたが、委細を聞くと、沈吟するもの稍や少時、

『太儀ながら、宿へは歸らず、今一度、家康方へ罷り越されたい。』といつて、

『御返答の趣き、了承致した。然りながら、天下の事、是非、談合せでは叶はぬ。思ひ返されて、上洛せられたい。然る上は、今程、奥方のないを幸ひ、拙者妹を差し上げたい。尚ほ、大政所をも送り申さう。それに對して、貴方よりは、お子の一人を申し受け、拙者、養子に致したい。』と告げさせ、家康の再考を促した。

こゝに於て、家康も

『然らば……』といふので、諸老臣と議し、愈よ、秀吉の求めに應ずることとなり、兩家の和睦は、忽ちの間に調つた。

手島堵庵の歌に、

拔かぬ太刀の、功名こそは、貴とけれ。
放たぬ矢にて、射るも同然。

と。秀吉の事である。その速かに天下を一統し得た所以のもの、怪しむを要せぬ。

五の十　可もなく不可もなし　（孔子）

常道を墨守し、風習に拘泥して、遷ることを知らない者は、凡人である。勿論、大業を成すには足らぬ。一途に可とする所もなく、一途に不可とする所もなく、時宜次第、宜しきに從つて、事、始めて成る。而も

これ、濶達不拘の士のみの能くする所である。

秀吉が、徳川家康と和した時、秀吉の弟大和大納言秀長は、

『たゞ一人の老母を、敵方への人質にするなどは、武門の名折れでございませう。家康が、どこどこ迄も、上洛を拒むに於ては、快く御一戰然るべきかと存じまする。』と敦圉いた。秀吉は、一笑して、

『古人の言にも、

大功は、細瑾を顧みず。

といふではないか。汝の申條は、狹量に過ぎる。共に大事を語るに足らぬ。家康の如き名將が、我が手につかうものなら、天下を掌にすること、束の間に在らう。兵を交へて、縱し、勝利を得るにしても、それには、夥しい犧牲を拂はにやならぬ。永く、我が家の禍根となる虞れ

もある。この際の計としては、萬事を忍んで、彼れと和するの一途あるのみぢや。大事を心がける者は、戰はずして勝つの用意がなくてはなるまい。』と諭した。秀長も、成程と嘆服したとか。

まことに、秀吉は、濶達不拘の天才であつた。天下一統の大業の爲めには、何事、何物にも拘泥せず、時宜に從つて、あらゆる手段を用ひることが出來た。これ、その曠世の英雄たる所以で、凡人の學び得る所ではないが、これでなければ、大事業は成されないのである。

五の十一　兵を抗げて相加ふれば哀しむ者勝つ　（老子）

戰ひを好む者は、人を殺すことを好む者である。天下蒼生の爲めに、世亂を定めるべく、已むを得ずして戰ふ者は、爲めに毀損せらるゝ人命

に對して、哀傷、措く能はざるものがあらう。これ、至情である。至情は、至誠である。至誠は、人を動かす。能く人心を收攬して、戰勝を博する所以である。

賤ケ嶽の役は、時、初夏に屬し、敵、味方の死者、怪我人が、山野に横はり、炎天に曝されて、その狀、まことに、慘鼻を極めた。秀吉は、戰場を見廻りながら、然うした死者、怪我人を見る毎に、お合す者の笠を借りては、これを覆うた。見る者、何れも感動し、この人の爲めにな ら、一死、惜しむに足らず、との念を催したといふ。

斯くてこそ、秀吉は、能く成功した。

五の十二　拔かぬ太刀の功名（和　諺）

勇を以て人に臨めば、人をして

窮鼠、猫を嚙む。（和　諺）

の暴擧に出でしむる虞れがある。老子曰く、

天の道は、爭はずして、善く勝つ。

と。人を服し得んが爲には、宜しく、這般の用意があるべきである。

西海の役、秀吉は、宇土へ着くと直ぐ、石田三成、安國寺惠瓊二人に命じて、

『九州、二島の者共、その儘、助け置かれる。尙ほ、所領も、これ迄通り、下し置かるゝ間、早々罷り出で、お禮を申し述べよ。』と觸れさせ、且つ、在々所々に、その旨、高札を建てさせた。爾來、三日を出ずして宇土の陣へ參る者、六七十人の多きに上つた。

これ、所謂る不爭の德である。「拔かぬ太刀の功名」である。

五の十三　その雄を知りてその雌を守れば天下の谿となる（老子）

武勇の能く人を壓服するに足るものがあつて、而も、その武勇を用ひず、却つて柔弱を以て人に臨めば、人は、求めずしてこれに歸する。猶ほ、百川の自然に谿に集まるが如くである。

西海の役、秋月長門守種長は、小熊の城を出て、降を秀吉の陣に請うた。秀吉は、快くこれを容れ、且つ、

『御邊の家には、檜柴の茶入といつて、希代の名器を傳へてをるげな。一見したい。』と、取り寄せさせて、これを所望し、

『では、城へ歸るがよい。長く此方に留まれば、軍兵共も、怪訝に思ふであらう。予を防ぎ戰つたのは、弓矢執る身の習ひで、已むを得ぬ。既に、斯く降參の上は、予に於て、些か、遺恨に思ふ所はない。領地も、舊の如く遣はし置く。』といひ聞かせた。種長は、喜んで馳せ歸つた。

この時、士卒の了簡には、秀吉が、危害を種長に加へでもしたら、直ちに、秀吉の陣に突入し、斬り死にする迄と、その覺悟でゐたといふ。

秀吉が不爭の德は、こゝに至つて、益す明らかである。秀吉をして、その雄を用ひしめたならば、種長主從は、窮鼠となつて反噬したであらう。勿論、これを征服することは出來たにしても、人命に於て、財物に於て、時日に於て、德望に於て、秀吉の蒙る損害は、夥しいものがあつたに相違ない。度量、海の如き秀吉は、能く、その雌を守り、最も賢

明に、西海の一豪傑を始末し去つた。人と爭ふ者の鑑むべき所である。

五の十四　鳶飛んで天に戻り魚淵に躍る（詩經）

天空海濶、味方を容れ、敵を容れ、正邪、忠奸、一切を容れて敵としないのは、英雄の量である。

それ、一切を敵としない。故に、一切、能く敵たることを得ずして、これに心服する所以である。

島津義久は、苦戰幾回の後ち、頭を圓めて、秀吉の軍門に下つた。秀吉は、これを引見して、

『天朝に敵した者は、その罪、最も重い。但し、降參の上は、死を赦されることに取り計ふであらう。無刀の段、神妙に存ずる。これを指されよ。』といつて、自ら、双刀の鐺を取つて、義久に與へた。傳へ聞く九州の士は、益す、秀吉に心服した。

義久自身は、最も心服した。他日の致身は、蓋し、この時に胚胎するといふ。

五の十五　柔能く剛を制し弱能く强を制す（三略）

剛强を以て剛强に對すれば、兩つながら、疵を受ける。剛强を制する道は、柔弱を以てするのが、最も安全であり、最も賢明である。

島津の家中にその人ありと知られた新納武藏守忠元が、初めて秀吉に謁すると、秀吉は、これに向つて、

『まだ、戰がしたいか。』と問うた。忠元は、昂然として、

『主人にお敵對とならば、幾度でも戰ひまする。』と答へた。秀吉は、『流石の勇士ぢや。』と賞めて、着てゐた陣羽織を脱ぎ與へた。忠元は、拜受して次室へ退いた。

すると、秀吉は、『今一品、やるものがある。』といつて、傍らなる白刄の長刀を執り、石突の方を出して、『これを持て。』と命じた。忠元は、身顫ひしながら、進み出て、それを受けた。

さて、歸宅の後ち、待ち受けた壯士等に、今日の首尾を問はれると、忠元は、『我々の敵し得る人ではない。今日こそは、武藏も、腰が拔けたぞ。』と

答へ、長大嘆息した。蓋し、謁見に際し、一刀を酬ひるの下心があつたのである。

剛强忠元も、秀吉の柔弱には敵し得なかつた。始めは、脫兎の如く、終りは、處女の如くに制せられてしまつた。大なるかな、柔弱の力！

五の十六　忍の明たる日月を踰えたり　（忍辱經）

忍ぶ者は、業を成し、忍ばない者は、事を敗る。忍ぶの最も難いのは他人の無禮を忍ぶに在つて、下輩の無禮を忍ぶのは、上輩の無禮を忍ぶよりも難い。

秀吉は、屢ば、小田原城主北條氏政の上京を促したが、氏政は、頑として應ぜず、果ては、

『眞田昌幸の所領沼田を渡されたら、上京致さう。』と、無禮な事をいつて來た。秀吉の諸將は、何れも、その請ひの容るべからざるを主張し即時の進軍を勸めたが、秀吉は、事の穩便に了されんことを欲して、いふが儘に、沼田を與へた。けれど、氏政は、上京しなかつた。秀吉は始めて、小田原征伐の軍を發した。

秀吉の隱忍ぶりを看取せよ。

五の十七　一忍以て百勇を以て支ふべく一靜以て百動を制すべし（蘇洵）

勇猛に襲ひかゝる者は、忍耐、以てこれを支へることが出來、狂暴に突き進む者は、冷靜、以てこれを制することが出來る。愚人、この理を

知らず、勇猛に對するに勇猛を以てし、狂暴に應ずるに狂暴を以てすること、その常であるが、これ、殆んど、薪を抱いて火に投ずるものである。彼れの勇猛をして、益す勇猛ならしめ、彼れの狂暴をして、益す狂暴ならしめ、結局、自ら傷つくるに終る。

佐久間久右衞門安次、同源六實政は、柴田勝家の猶子である。勝家の亡後、秀吉を仇とし、一たび、怨みを報ぜんとして、河内の三國峠城長野の烏帽子形城等に據り、抗爭、大に努め、その都度、秀吉に攻略せらるゝに及んで、北條氏政に仕へ、小田城に籠つて、尙も秀吉に楯つき落城の後ち、稱名寺に駈け入つた。

斯くと聞いた秀吉は、

『安次兄弟が、我れを仇としてつけ狙ふこと、まことに、大丈夫の志

ぢや。』と賞め、

『然し、天下は、最早、秀吉の手に歸した。この上は、圖を改めて、我れに降り、我れを父とも思へ。』といつて、安次に三萬五千石、實政に一萬石を與へ、蒲生氏郷に附した。

これ、敵の勇猛、狂暴に對するに、忍耐、冷靜を以てしたのである。火、烈しくとも、水には得勝たぬ。安次兄弟も、終に、秀吉に制せられざるを得なかつた所以である。

五の十八　王侯將相寧ぞ種あらんや　（史記）

家系、門閥は、以て愚人を驚かすに足る。結局は、實力の世である。實力のある者、獨り、大業を擧げることが出來る。

小田原落城の後ち、秀吉は、一日、鎌倉に遊び、白旗の宮に源頼朝の木像を見、その背を撫でながら、

『古來、空拳赤手で天下を取つた者は、貴公と自分ばかりぢや。けれど貴公は、名族の出ぢや。自分が、水呑百姓から起つたのとは、比較にならぬ。況して、自分には、支那四百餘洲を攻め取る計畫があるのぢやもの、貴公とても、自分には及ばぬ。それは左に右、貴公と自分とは、天下友達ぢや。』といつたとか。

門閥を以て誇る者、この言に對して、果して何の顏色かある。「王侯將相、寧ぞ種あらんや。」人間、恃むべきものは、たゞ實力があるばかりである。

五の十九　古人今人流水の如し（李白）

流れる水の晝夜を舍てない如く、時々刻々に死につゝある身、富貴といふも、夢である。貧賤といふも、夢である。夢の世の中に、何一つ、貴重として心にかくべきものはない。

蒲生氏郷が、會津に封ぜられた禮に行くと、秀吉は、

『貴公は、字が巧いげな。幸ひぢや、謠曲を一番だけ寫して貰はう。』と料紙、硯を授けた切り、談、曾つて、封命の事に及ばなかつたとか。

秀吉の見る所、百二十萬石の大封も、その輕きこと、謠曲一番の如くであつたのである。名利の小人輩、以て如何とする？

五の二十　上に居る者は寛を以て道と爲して察を好むことを欲せず（伊藤仁齋）

長者の德は、寛大を以て第一とする。微細に亘つて、下の過失、非曲を嗅ぎつけ、調べ立て、これを責めて、一歩も假借しないといふのでは諺にいふ、

水清ければ、魚棲まず。

で、結局は、下の心を失つてしまふ。

小田原平定の後ち、奥州葛西、大崎に、一揆が起つた。闇に、伊達政宗の煽動する所で、その證左の歴然たるものがあつた。蒲生氏郷の努力に依つて、事が終ると、秀吉は、早速、政宗を召し、その賊に通じた書

を出して、詰責した。政宗は、故意と驚いた風をして、

『それは、飛んでもない讒言でござりまする。この華押からが、某の書くものとは、違つてをりまする。手前の書きまする鶴鴿には、眼がありますのに、これには、眼がありませぬ。何者かの僞作でござりまする。』と強辯した。調べて見ると、成程、その通りであつた。秀吉は、復た問はず、その儘、政宗の罪を赦した。政宗の強辯が、たゞの強辯に過ぎないことは、秀吉にも解つてゐた。たゞ、鷺を烏といひ黒める政宗の大膽不敵さに感じて、斯くは取り計らつたのである。

であるから、徳川家康は、その臣井伊直政に語つて、

『太閤の大器は、政宗に百倍する。』と嗟嘆した。

まことに、秀吉の大度量は、凡人のものではなかつた。寛大は、長者の徳ながら、欺きを欺きと知りつゝ、欺きを容れ、欺く者の罪を赦すに至つては、寛大も亦た極まれりである。

五の廿一　惠んで費さず　（孔子）

世には、困窮の人が多い。富裕の者が、これを惠み濟ふのは、當然の事ながら、單に金品を與へるといふ惠み方をしたのでは、岩崎、三井も堪るまい。人を惠む者は、「惠んで費さず。」——費さずして惠むの計があるべきである。

天正某の年、畿内が饑饉して、餓者、道に横はるの慘狀を來した。秀吉は、百方、これが救濟方に苦心した末に、加茂川、桂川などの堤防工事を始めた。貧民等は、その工事に出で働き、その賃銀に依つて、饑餓

を免れた。

これ、費さずして惠んだのである。二宮尊德は、無利息貸付法を行つた。皆、惠む者に損がなくて、惠まれる者に利益がある。研究したら、種々の方法があるであらう。

五の廿二　雞を割くに焉んぞ牛刀を用ひん（孔子）

大事に力を入れる者は、大人物である。小事に力を入れる者は、小人物である。

黑田孝高は、棋將が好きであつた。その談に、關白秀次は、孝高よりは、少々强かつた。その差しぶり、一番勝つては、

『眞實に負けたのか、故意と負けたのぢやないか。』と念を押し、然る後

ち、安心するといふ風であつた。

秀吉は、ほんの駒の道筋を知つたばかりで、極めて初心であつたが、天下の名人を相手とし、相手が故意と負けるのを知りながら、押付勝ちに勝つて、喜んでゐた。

『關白のあの小器では、なかなか、太閤の後は繼げまい。』とは、孝高の評であつたが、果してその通りであつた。

雞を割くのに、牛刀を用ひたのでは、道具が大き過ぎる。將棋の遊び位ゐに、力を入れるには、秀吉の人物は、大き過ぎた。秀次の人物が相應してゐた。亦た以て、人物の大小を見ることが出來る。

獨り、將棋のみではない。區々たる名利位ゐに、力を入れ、五萬、十萬の金を溜めれば、一廉に成功した氣になつて、得意顏をする者は、そ

の人物が小さいのである。大人物が力を入れるには、名利以上、もつと大きい問題がある筈である。

五の廿三　**楚王弓を失ふ楚人これを得ん又た何ぞこれを求めん**　（孔子家語）

偉人の能く偉人なる所以は、一人を以て我れとせず、衆人を以て我れとし、幸福を私する考へがないに在る。

或る時、秀吉の飼つてゐた鶴が、逃げ出した。番人は、その由を訴へて、罪を請うた。秀吉は、

『異國へ逃げやうか。』と問うた。番人は、

『飼鳥の事で、そんなに遠くへは得行きますまい。』と答へた。秀吉は、

『日本の内にをることなら、差支はない。』とばかり、重ねて問はなかつた。

流石は秀吉、四海一家と迄は行かなかつたが、日本一家の度量はあつた。一羽の鶴ながら、これを私しなかつた所、以て、その偉人たるを證するに充分である。

五の廿四　**飽くまで貪ひ終日心を用ふる所なし難い**
かな博奕なるものあらずやこれを爲すは
猶ほ已むに賢れり　（孔子）

飽食暖衣、無爲に日を送るのは、死んだも同然である。元氣も失せ、氣力も衰へ、何をするにも臆刼になつて、果ては、事實上にも死んで行

く。

秀吉、或る戯ひに、馬廻りの者の陣小屋を見廻ると、或る小屋では、今しも、酒宴を催してゐる様子。覗いて見ると、一人は、具足櫃に腰かけて、皷を打ち、一人は、扇を手にして謠ひ、今一人は、盃を控へ、何れも、甲冑を着けてゐる。供の者たちは、氣色如何と心配したが、秀吉は、案外の上機嫌で、

『あれを見よ。退屈せぬ奴原ではある。』と笑ひ、

『それそれ、酒を取らせよ。但し、飲食共、過さぬやうと氣をつけよ。』

と差圖した。

秀吉は、退屈を嫌つた。退屈とは、無爲に日を送ることである。

遮莫、陣中、甲冑を着けての皷、謠ひは、一入優しく想はれる。今の

人の好んですなる、粉脂の香の漲る料亭での酒宴と如何？

五の廿五　この倨々たる者は何れぞや　（孔子家語）

倨傲尊大、自ら偉がる者は、眞に偉くないのである。眞に偉い人は、服裝、態度、言語、擧動の類、殆んど無智の野人の如く、往々、小人、婦女子の侮る所となる。彼れには、邊幅を修飾するなどの小分別がないのである。

或る年、淀川の洪水を檢分しつゝあつた秀吉は、事の急なるを察し、

『これは險呑ぢや。自分も手傳はう。』といつて、友田某なる者を相手に土を荷ひ、土俵を運んだ。大小名以下、坐ながら見てゐるわけにも行かず、共々、力を添へたので、堤は、忽ちの間に成就し、さしもの大水を

堰ぎ止めることが出來た。

闕白を以て士俵運び——小人物に、この藝當は難かしからう。

五の廿六　大人は赤子の心を失はず　（孟子）

赤子の心は、無邪氣である。外面を飾らうの、人に偉く見られやうの人を欺さうの、無理から金を溜めやうの、名を揚げやうのといふ野心はなく、たゞ、自然の儘にいひ且つ行ふ。これが、無邪氣であり、赤子の心であり、そして、大人の心である。

立花宗茂が、機嫌伺ひとして、大阪へ上り、城内の一室に控へてゐると、奥から騒々しい音がして、大勢の人が、どやどやと出て來た。乳人に抱かれた秀頼、童女大勢の中に、秀吉は、帶解き擴げ、背ろには、大

小を捧げた尼孝藏主が從いてゐる。秀頼の雀の子が逃げたからの大騒ぎであつた。

時に、秀吉は、宗茂を見て、

『立花か。態々の見舞ひ、忝く思ふ。』と謝し、臺の上なる土産の銀子百枚の内一枚を取つて、

『これは、吾等へ申し受ける。殘りは、改めて其方へ進せやう。京都は殊の外、面白い處ぢや。この金で、緩々、見物せられよ。』といつた。

秀吉は、邊幅を飾るに意のない人であつた。家庭の人としては、殊に然うで、殆んど小兒の如くに無邪氣であつた。

五の廿七　善く士たる者は武からず　（老子）

孔子には、

威ありて猛からず。

の語がある。威は、德の顯はれである。特に猛しい所はなく、温顔、以て、人に接する間にも、どことなく、威嚴の犯し難いものがある——これでなければ、人を心服させることは出來ぬ。

佐野城主天德寺了伯の談に、上杉謙信、武田信玄に謁した時は、二人共、屹とした應對ぶりで、人を威壓すること甚だしく、了伯は、顔を擡げることも出來なかつた。

然るに、秀吉になると、

『やあ、天德寺か。好うこそ見えられた。』と、側近く座を占め、

『久しぶりではないか。』と、膝を叩くなど、懇切な樣子で、人をして、

沁々と、感激の情、敬愛の念を催さしめたといふ。

この話に據つて、土屋檢校はいつた、

『甲州者は、信玄が、若し、長命せられやうものなら、天下は、この人のものぢやと、こんなことをいつてをる。自分も、然う思つたが、實は違ふ。秀吉のやうな器量でこそ、人も心服し、自然、天下を一統することも出來るのぢや。信玄や謙信などとは、人物が違ふ。』と。

成程、秀吉の人物は、信玄等に比べて、一段の上に在つたらしい。

五の廿八　事大小となく正道を踏み至誠を推し一事の詐謀を用ゆべからず　（西郷南洲）

大業を成すには、衆人の力を假らなければならぬ。衆人の力を假るに

は、先づ以て、その心を得なければならぬ。その心を得るには、至誠を以て接しなければならぬ。

斯くて、古來の英雄、偉人は、すべて、至誠の人であつた。

秀吉、或る時、伏見の城で茶の會を催した。秀吉自身、茶を點て、諸將に侑めるのに、茶碗が、順次、大谷吉隆へ廻されると、吉隆は、執つて飲まうとして、茶碗の中へ、一滴の鼻汁を落した。癩疾の吉隆、その鼻汁は、實は、血膿である。茶碗を次へ廻すことが出來ぬ。困り切つてゐると、秀吉は、早くも看て取つて、

『刑部、その茶は、出來が惡い。點て直さう。』と、奪ふが如くに茶碗を引き取り、改め點てゝ、一同に侑めた。吉隆は、やつと、窮地を脱することが出來た。

吉隆は、深く秀吉の恩に感じ、一死、以て、これに報ひるの決心をした。關ケ原の役に及び、事の成るべからざるを知つて、石山三成に味方し、戰死を遂げたのは、畢竟、報恩の微志に出た事といふ。

秀吉の擧を以て、英雄、人を欺くものとし、一個の籠絡手段と解する者があるならば、秀吉を知らないのである。成程、英雄は、人を欺く。但し、それは、小英雄の事であつて、大英雄の事ではない。大英雄中の大英雄なる秀吉の如きは、至誠を以てして、衆の心を得たのである。

五の廿九　巧僞は拙誠に如かず　（說苑）

小人は、左右、巧僞を用ひたがる。正義、正道を迂遠とし、たゞ利巧に、たゞ上手にと心がけて、それを成功の近道と考へる。けれど、「巧

僞は、拙誠に如かぬ。

上手な僞りより、下手な誠。（和諺）

である。人は、篤とこの事を知らなければならぬ。誠のない利巧は、結局の馬鹿、誠のない上手は、結局の下手、といふ事を。

秀吉が、

『古來の例を見るのに、正しい者は、初めは弱くても、後になると、必らず強い。邪な者は、初めは好くても、末に至つて、きつと害がある。慎しまにやならぬ。』といつたのも、亦た、この意味に解してよい。

まことに、慎しまなければならぬ。

五の三十　一切有爲の法は夢幻泡影の如し（金剛經）

人間萬事を夢と觀じて、富貴、貧賤、夷狄、患難、その他一切の運命を、輕い心で見て置く。斯くて、何事、何物にも執着しなければ、これ佛敎謂ふ所の解脫である。

秀吉は、略ぼ、この解脫の域に達してゐた。平生、人に逢ふ毎に、

『何うぢや、好い夢を見たか。』と笑ひ、

露と置き、露と消えぬる、我が身かな。

なにはの事は、夢の世の中。

といふ辭世を遺したなど、以て、解脫の心境を想ふことが出來る。

察するに、斯く解脫してゐたればこそ、何事につけても、濶達不拘、縱横自在に振舞ふことが出來たのであらう。人生を夢と見るのは、決して、世外人のみの思想ではない。

五の卅一　財聚まれば民散ず財散ずれば民聚まる　（大學）

貪慾漢には、金は聚まらう。人は散じて、誰れも寄りつかない。金を得て、人を失ふ——利害如何？　人を失つて、大事は成らぬ。英雄の士が、よく金を散じた所以である。

秀吉は、最もよく金を散じた人である。外出毎に、銀錢入りの大財布を携へ、途中、子供や乞食、非人を見ると、その金が皆無になる迄、撒き與へた。

藏拂ひといつて、庫中に充滿した金銀を取り出して、諸大名に分與すること、再度に及んだ。その言に、

『たゞ積む一方で、散ずることをせねば、良い侍を牢へ押し込めて置くやうなものぢや。』と。

功のある諸候へ加增するにも、大きく一個國、二個國と與へた。

『それでは、お藏入りが少くなりませう。』といふ者があると、

『我れ、天下を取つた上は、諸大名に與へたものは、要するに、我がものぢや。藏入りがなくなつたら、毎日、交番に、一飯づつ、諸大名から養はれても濟む。』斯ういつて、夷然としてゐた。

何等の大腹中！　而も、斯くの如くであつたればこそ、天下の英雄、喜んでこの人の下に聚まり、その成功を速くしたのである。

衣類は、何の爲めにか着る。寒さを凌ぎ、暑さを厭はんが爲めなり。さあらば、寒からず、暑からず着ば、麁服にても、厭ふことあるべからず美服に奢るは、未だ寒暑の身に沁まざるが故なり。寒暑の身に沁みなば莚、裸にても厭ふ者あるべからず。食事は、何の爲めにかする。空腹を止めんが爲めなり。さあらば、副へ物はなくて足りなん。副へ物なくて食の進まざるは、未だ飢の至らざるなり。飢の至る時は、糟糠をだも嫌はず。家は、何の爲めに作れる。雨露を厭はんが爲めなり。さあらば、無益の造作など爲さで足りなん。水火の災ひに家を失はゞ、人の軒端にても厭ふ者あるべからず。（皆川淇園）

六の一　人察なれば徒なし　（荀子）

大過は、勿論、責めなければならぬ。小過は、見ない風で過す。大惡は、素より罰しなければならぬ。小惡は、不問に附して置く。これが、人に長たる者の德である。

或る年の秋、秀吉は、東山へ茸狩りに行つた。その前日、役人が、下檢分をすると、松茸は、人に取られて、最早、殘り少なになつてゐた。因つて、他から取り寄せて、一夜の中に、植ゑつけたのであつたが、秀吉は、大勢の女房共と、その松茸を取つて、機嫌上々吉であつた。

すると、或る女房が、

『お氣づきにはなりませぬか。實は、これこれで……』と、仔細を秀吉

に告げた。秀吉は、笑つて、

『それは、判つてゐる。予を楽しませやうと思へばこそ、そんな事もしたのぢや。その心を過分に思ふ。餘計な事は、いふな、いふな。』と手で制した。

斯くて、終日、打ち興じて、歸邸した。

植ゑつけた松茸を、天然の松茸と偽はる——秀吉を思つての事にもせよ、左に右、偽はつたのである、欺いたのである。偏狹の主ならば、人を馬鹿にしたものとして、内心、不平なきを得なかつたであらう。秀吉が、その擧に出でず、却つて以て、過分とした大度量は、啻に、小過を恕し、小惡を問はない位ゐの事ではない。偉なるかな。

六の二　智者の心は留滯なきこと流水の如し　（熊澤蕃山）

凡下の輩は、一身の利害、他人の思惑、世間の習慣、服裝の如何などに拘泥して、自由自在が利かないでゐる。道德を無視し、正義を蔑如しての我が儘放題は、勿論、不可であるが、いふに足りない小問題に障へられて、退嬰萎縮、手も足も出ないなどは、智者の取らない所である。

祐筆の者が、物を書くのに、偶ま、醍醐の「醍」の字を忘れた。秀吉は、それを見て、疊に指で「大」の字を書きながら、

『斯う書けばよい。』とばかり、平氣でゐた。

秀吉が、「大」を以て「醍」に代へた無學は、賞めるに足らぬ。たゞ事は、小事に屬する。斯かる小問題に頓着せず、流水の留滯なきが如く

に事を運んだ濶達不拘は、流石に英雄秀吉であつた。

六の三　吾れ嘗つて終日食はず終夜寢ねずして以て思ふ益なし學ぶに如かず（孔子）

少しく才のある者は、その才を恃んで、學問を怠る。けれど、生れながらの頭に、道義、道德の高尚な問題、天下、國家の重大な問題の解せやうわけはなく、所謂る才は、金儲け位の小事に間に合ふのみである。

秀吉は、平生、學者、僧侶などを、伽の者として採用し、政務の暇毎に、寢ながらその話を聞き、或ひは、治國の道、攻戰の計などを問うた。伽の者は、和漢の書に見える程の事を擧けて答へた。秀吉は、その中、成程と思ふ事があれば、直ちに取つて、實際に施したといふ。

果して然らば、秀吉、決して、無學の人ではなかつたのである。才を恃んで、學問を怠る者は、思はなければならぬ。

六の四　子怪力亂神を語らず（論語）

孔子は、怪、亂、神と共に、力を口にしなかつた。人の價値は、德に在つて、力にないからである。

荒木村重は、幼名を十二郎といつた。膂力、人に絶れ、年十二といふに、碁盤の小角を持ち、父義村をその上へ載せて、室内を持廻つた。義村は、我が子の前途を思ひやつて、非常に喜んだ。けれど、村重は、『力だけでは、何になりませう。亂世の今日、切めて五六個國も攻め取るのでなければ、力の効能も顯はれません。』とばかり、誇る色がなかつ

た。義村は、益す喜んだとの事である。

村重が、その膂力に誇らなかつたのはよい。而も、誇るに足りないものは、權力、財力、智力、辯力、皆同斷である。誇るべくば、宜しく德に誇るべきである。

六の五　眞の友は不變の友である　（ジョーザ、マグドナルド）

人の境遇、地位、運命は、時々に變る。それに連れて、友誼も變り、昨の親友、今は乃はち、悠々たる路上の人となるのが、世間の常態である。その友たる、眞の友でないのである。眞の友は、境遇、乃至、運命の變化に關はらず、その友誼の不變不易なる友でなければならぬ。

天正六年、織田信長は、讒を信じて、荒木村重を誅せんとした。村重

は、恐怖の餘、攝津の有岡に據つて反した。豊臣秀吉は、信長に請うて單身、有岡城に入り、懇々、これを諫めた。けれど、村重は、聽かなかつた。

時に、村重の臣河原林越後守は、

『秀吉を殺して、信長の片腕をお斷ちなされよ。』と、村重に勸めた。けれど、村重は、

『自分と秀吉とは、數年の親友ぢや。殊に、自分の爲めを思ひ、自分を信じて、たゞ一人、諫めに來た者を殺すのは、禽獸にも劣る振舞ぢや。勝敗は、天に在る。秀吉一人を殺したとて、然迄の利はないであらう。』と斥け、顏色も和らかに、酒肴を調へ、欵談に時を移し、秀吉の退出する時には、手を取り合つて、これを玄關迄見送つた。

即はち、秀吉と村重とは、互ひに、敵味方に別れて後ちも、平日の友誼を變へなかつたのである。兩者は、不變の友であつた。即はち、眞の友であつた。朋友の相交はるは、斯くの如くでなければならぬ。

六の六　兄弟牆に鬩げども外その侮りを禦く（詩經）

兄弟の不仲といふ事、既に惡い。不仲の事情を世間へ見はして、他人の批判を招くなどは、言語同斷である。

前田利家の兄藏人利久といふは、將たる器でない上に、他姓の子を養つて、家を讓らうとした。織田信長は、大に怒り、その祿二千貫を奪つて、利家に與へた。柴田勝家、森可成、佐々成政などが、祝ひに來て、交も、利久を誚り、利家を譽めると、利家は、怫然として色を作し、

『成程、兄は、不才でござる。けれど、各のには、吾等が、今、嫡子になつたものぢやから、利久を誚つて、吾等を譽められるのであらう。そんなお世辭は嫌ひでござる。』と罵つた。勝家等は、大に驚いて、失言を謝した。

勝家等が、利久を誚つて、利家を譽めたのは、必らずしも、お世辭ではなかつた。利家が怒つたのは、兄を誚られたことを怒つたのである。若しくは、兄弟の事が、他人の口端にかゝるのを不快としたのである。利久、利家二人の間が、不和であつたかなかつたかは、今、知る由もない。利家の言から推すに、縱し、不和であつたにしても、それを世間へ見はして、外侮を招くやうな愚擧を敢へてする利家でなかつたことだけは、明白、疑ひのない所である。

兄弟の交りは、これでなければならぬ。血で血を洗つても、奇麗にはならぬ。兄弟の恥ぢは、自分の恥ぢである。人に聞かせて、譽める者があるならば、それは、惡むべき、おべつか屋である。識者は、却つて一笑するのであらう。

六の七　その君を知らずんばその使ふ所を視よ　（孔子家語）

聖主は、賢臣を以て寶とする。名將の名將たる所以は、擇んで忠勇の士を用ひるに在る。家來を見れば、主人が判る。

長篠の役に、前田利家は、朱甲の敵と戰つて傷き、家臣村井又兵衛長賴の來り援くるがあつて、漸く、その首を獲た。主人信長が、利家の功を賞めると、利家は恐縮して、

『手前は、又兵衛のお蔭で、助かりました。敵を討ち取つたのは、又兵衛の功でござりまする。』と辭退した。信長の曰くに、

『又兵衛のやうな勇士を家來に持つこと、これ、大きな功ではないか。』

とあつたとか。

何等の名言！　人に長たり、家に主たる者は、自分の力を恃まないで下の力を恃み、恃み得るやうの下を擇び用ひるのでなければならぬ。

六の八　先生の風は山高く水長し　（范仲淹）

身の貧賤は、憂ふるに足らぬ。心ばかりは、高く貴く持ちたいものである。

心を高く持つとは、傲慢の意ではない。この心をして、利害得失、毀

奉褒貶などいふ外物の束縛から脱出せしめ、爲めに惑はされず、汚されず、己れの眞を保つて失はないのが、心を高く持つのである。

心を持つこと斯くの如くにして、始めて、眞の人格がある。我れ、我れの主となつて、外物の爲めに動かされないに於て、人格は、乃はち全い。

であるから、前田利家は、左右に敎へて、

『侍は、心を富士の山のやうに高く持つて奉公すべきぢや。』といつたとか。而も、侍のみの事ではなく、何人も、心を富士の山のやうに高く持ちたいものである。

六の九　富貴なれば他人も合ひ貧賤なれば親戚も

離る　（文選）

人間の萬行、輕薄程憎むべきはないが、人間は、輕薄なものである。その輕薄は、一富一貧の際に於て、最も明白である。古人が、

落ちぶれて、袖に涙の、かゝる時、
人の心の、奥ぞ知らるゝ。

と嘆じたもの、眞に然り！

關白秀次が、罪を蒙つた時、猪子内匠、宗無なども、連坐して吉野へ流された。平生、二人と昵懇にしてゐた前田利家は、早速、これに金子を贈り、且つ、兩人秘藏の道具を引き取り、大切に保管した。その中に宗無肩衝といつて、代金七十枚に上る、立派な茶入があつた。奉行の詮

議が嚴しいと、利家は、

『これは、前廉、自分が買ひ取つた品ぢや。』と挨拶した。奉行等も重ねては問はず、希代の名器は、幸ひに、官沒の厄を免れた。

翌年、利家は、兩人の爲めに、赦免を請うた。それに依つて、兩人が歸參すると、茶入以下、道具一切を返し取らせた。

利家は、嘗つて、自分の經驗を語つて、

『浪人した時には、眞に見繼いでくれる者は、至つて少いものぢや。』といつた。今も昔も、人間は、輕薄なものである。利家が、宗無等兩人を庇つた事の如きは、世に希有としてよい。學ばなければならぬ、勉めなければならぬ。

六の十　志滿つれば九族乃はち離る　（書經）

傲慢な人は、他の尊敬を得やうとして、却つて、その輕侮を招く。他を服從させやうとして、反對に、その擯斥する所となる。傲慢位ゐ、人に嫌はれる不德はない。啻に、他人に嫌はれるのみならず、九族さへも離れてしまふ。尙ほ且つ、人が、左右、傲慢になりたがるのは、何うした事か。

前田利家の侍者が、福島正則への禮狀に、「鯉二尾到來、滿足せしめ……」と、稍や高ぶつた書き方をすると、

『同輩以下への書狀は、慇懃に書く程、先方では喜ぶ。我れと汝とは、これ程、位が違ふ、といはぬばかりの書き方は、如何にも小身な、愚人

のする事ぢや。』といつて、書き直させた。

一語、傲慢者の好教訓！

六の十一　英雄でなければ英雄を知ることは出來ぬ　（ゲーテ）

英雄は、誠の人である。英雄は人をおく者、油斷のならぬ者、と位ゐに見る者は、その人自身が、小人である所から、英雄の眞骨頭を得解せぬのである。恥づべき事である。

四國一島の主長曾我元親は、天正十三年、豊臣秀吉に降ると、早速上京、これに謁せんとして、準備を老臣等に命じた。老臣等は、以て危險とし、篤と上方方面の事情を探索し、來春を待つて出發、然るべきを勸めた。けれど、元親は、

『秀吉は、天下の武將ぢや。そんな反覆の小人ではない。』とばかり、僅かに五十餘人を引き具して、大阪へ行き、秀吉に謁した。果然、秀吉は大に喜び、欵待の限りを盡した。

吾等は、英雄秀吉を知つたことによつて、元親の亦た英雄であつたことを知る。

六の十二　劍は一人の敵のみ學ぶに足らず　（項羽）

名將は、一劍を恃む心がない。三軍の刀を我が刀として、以て身を護り、以て國を保つからである。

韮山城主北條氏規は、氏康の第四子である。若年の頃、兵法の達人と號する者が、小田原へ來ると、家中の士は、爭つてこれに學んだが、氏

規のみは、見向きもしなかつた。人が、入門を勸めると、『兵法などは、事が小さい。下輩の習ふものぢや。配下に侍の二三人も持つた者が、然やうの志は、以ての外ぢや。兵法で人を斬つたとて一人か二人の事ぢやらう。自分の兵法は、一度に五千も一萬も斬るやうにと、常々、心がけてをる。』との言葉に、聞く者は、舌を卷いた。

これ、正に、

書は、以て姓名を書するに足る。劍は、一人の敵のみ。學ぶに足らず。請ふ、萬人の敵を學ばん。

と傲語した、楚の項羽の心である。

が、これは、單に武將の心がけのみではない。凡そ、大事業を成さうとする程の者は、一人の力を恃んではならぬ。他人の耳を己れの耳とし

他人の目を己れの目とし、他人の手を己れの手とし、他人の足を己れの足とし、衆人の力を假り用ひて、事、始めて成る。而も、衆人の力を假り得る爲めには、至誠、以てその心服を得なければならぬが、この事、小才、小智の徒の能くする所ではない。

六の十三　士に貴ぶ所はその節義あるを以てなり　（賴山陽）

他人の恩惠、素より感謝しなければならぬが、爲めに主義を曲げ、節操を棄てるのは、男子の禁物としなければならぬ。

豊臣秀吉から、小田原の北條氏政へ向けて、屢ば、上京を促して來た。氏政は、弟氏規を選んで、これが答禮使とした。秀吉は、百方、これを優遇し、言葉を慇懃にして、氏政父子の上京を勸めさせた。氏

規は、委細を了して、

『仰せの趣き、篤と父子に申し聞けまする。御慇懃の段、謝すべき辭もござりませぬ。』といふ下から、

『然りながら、父子の者、上京を肯ぜず、無事が破れて、愈よ、關東へ御進發といふ場合、一門、兄弟を離れて、御内通などは、存じも寄らぬ事。某、必らず先鋒となり、銹矢をお進め申すでござりませう。』と豫告した。秀吉は、莞爾として、

『否々、無事は破れはせぬ。要は、御邊の働き次第ぢや。よきに計つて左右、上洛を勸められよ。』と、懇切を盡して歸らせた。

秀吉の大腹中は、然る事ながら、欽すべきは、氏規の高節である。男子、これ程の氣骨がなくてはならぬ。而も、氣骨は、節義を重んずるの

邊から生じて來るのである。

六の十四　君は元首たり臣は股肱たり　（後漢書）

元首があつての肱股である。股肱があつての元首である。首、如何に貴くとも、首ばかりで立つことは出來ぬ。家來を顧みないで、一身の安をこれ求むる主人は、決して、良い主人ではない。

鳥居彦右衞門尉元忠は、德川氏譜代の臣である。三州矢作四萬石を領し、關ヶ原の役には、主人家康の爲めに、伏見城を守り、石田三成等と戰つて、最も華々しい戰死を遂げた事は、普ねく知られてゐる。

天正八年、本多忠勝、榊原康政等と共に、高天神の城を攻めた時、小荷駄が遲れて、士卒等は、飢ゑに苦しんだ。時に、一卒があつて、食を

民家に求め、來つて元忠に侑めた。元忠は、

『其方等は、最早、食事をしたか。』と問ひ、卒が、

『否、まだでござりまする。』と答へると、

『士卒を措いて、自分一人、飢ゑを免れる位ゐなら、寧ろ、共々、餓死した方がよい。』といつて、その飯を捨てさせてしまつた。

この心、即はち、眞の主人の心である。今の主人が、奉公人には過度の勤勞を強ひながら、その身は、待合などに入り浸り、酒食の快を貪つてゐるなどは、不心得の甚しいものである。宜しく、主從一体の理を覺り、股肱あつての元首であることを會得して、今少しく、奉公人に同情すべきである。

六の十五　忠臣は二君に事へず　（王燭）

義を重んじて、利を輕んずるのが、忠臣の心である。利害によつて去就し、主人を變へ、二君に仕へるなどは、その思ひも寄らぬ所である。

たゞ憾む、古來、斯うした忠臣の甚はだ少いことを。

元忠は、少い忠臣の一人である。秀吉が、官位を賜はるやうの取計をしやうとすると、元忠は、

『不才の某、御恩惠に預りましても、二主へ忠を盡す道を辨へませぬ。殊には、三河譜代の者で、禮にも嫻ひませねば、官位を賜はつて、御前へ出られる器量でござりませぬ。御任官の儀は、固く御免を蒙むります。』と固辭した。

秀吉の富貴、權勢を以てしても、この忠臣の意を動かすには足りなかつたのである。

六の十六　難きを先にして獲るを後にす　（孔子）

忠臣が、君の爲めに粉骨碎身するのは、忠義の至情の然らしむる所で恩賞を目がけての事ではない。恩賞に心のある者は、その人、眞の忠臣ではない。否、寧ろ、忠臣を裝ふ所の僞忠臣である、奸人である。

元忠の戰功に對して、家康が、感狀を與へやうとすると、元忠は、『殿には、既に、某の手柄を御存じでござりまする。この上、御感狀を證據に、功に伐り申しませうや。』といつて、受けなかつた。

孔子曰く、「難きを先にして、獲るを後にす。」と。元忠は、啻に、恩

賞を後にしたのではなく、全然、恩賞を念はなかつたのである。眞の忠臣は、斯くの如くでなければならぬ。

六の十七　運は天に在り　（和諺）

好んで危險に投ずるのは、勿論、避くべきことであるが、妄りに危險を恐れるのも、愚である。禍ひは、往々、不測の邊から生ずる。危險、必らずしも危險でなく、安全、却つて、危險なる場合がある。これを運といふ。運は、天に在る。何が危險で、何が安全であるかは、たゞ、天が知つてゐる。

大谷刑部少輔吉隆は、元と、大友氏の臣である。主家滅亡の後ち、石田三成によつて豐臣秀吉に仕へ、賢名あり、累遷して、敦賀六萬石に封

せられ、五奉行の一人となり、關ケ原の役、西軍に屬して、戰死を遂げた。

吉隆は、所謂る運の理に達してゐた。朝鮮での事、

『こゝは、矢丸が澤山飛んで來て、危險でござりまする。あれへお立ち退きなされませ。』といふ者があると、

『運の矢は、一本限りよ。』とばかり、動かなかつたとか。

まことに、運の矢は、一本限りである。夥しい矢丸も、能く我れに命中して、我が命を取るのは、たゞ一本である。多くの矢玉を危險として、一本の矢を安全とするわけには行かぬ。安全といひ、危險といふ、畢竟、運といふことに歸着するのである。

であるから、危險を恐れるのはよいが、「妄りに」恐れるのは、間違

つてゐる。

六の十八　君臣を使ふに禮を以てし臣君に事ふるに忠を以てす　（孔子）

衷心、人を服するものは、誠である。金ではない。金さへ與へれば、人は、これを德として、心の底から敬服し、献身的に働くもの、と心得るのは、淺墓なる金持了簡である。若くば、人情を知らないのである。

吉隆は、石田三成に忠告して、

『貴殿は、家來を金銀で使はうとせられるらしい。大きな心得違ひでござる。實意を以てするのでなければ、家來は、決して、心服するものではござらぬ。世間の例にも、主人の貧しい時には、自然、禮も厚いから

家來が主人を思ふことも深い。富んで來ると、祿などを多く與へる代りには、禮がなくなり、家來が何をしても、過分とも忝いとも思はず、祿に對して、これ位ゐの事は、當りまへぢやとばかり思ひ、扱ひ方も、粗末になる。斯くて、人心の離れる例が多い。貴殿が、金銀で家來を使はうと思はれるのは、甚はだ宜しくない。御戒心、然るべう存ずる。』といつた。三成は、深く感ずる所あり、この忠告のあり難きを謝した。

蓋し、誠に服するのは、心の底から服するのである。金や利益に服するのは、一種の商賣行爲で、金が竭き、利益がなくなれば、直ちに離散してしまふ。平生無事の際には、便佞、以て、主人の驩心を得やうとの み勉め、一期、事があつて、身に危險が迫りでもすると、忽ち、逃げ腰になるなど、あてになつたものではない。金持ちには、誤解がある。宜

しく戒心すべきである。

六の十九　仁は人の安宅なり　（孟子）

大厦高樓、安宅ではない。仁に據る者、最も安泰である。金城鐵壁、恃むに足らぬ。德を以て、人の和を得ること、第一の要害である。

石田三成が、その城を堅固に普請した由を耳にすると、吉隆は、『大將の要害は、德に在る。德のある所、天下もこれに歸すると申せば城普請などは、抑も、末でござる。』と苦言した。

まことに、天の時は、地の利に如かぬが、地の利は、亦た、人の和に如かぬ。人の和を得る所以、一に德に在るとすれば、德こそ、第一の要害でなければならぬ。

六の二十　身を棺槨の中に投じ地下千尺の底に埋了以後に非ずんば與に天下の經綸を語るべからず道義道德もそれからの事なり　（河井繼之助）

人はいふ、「死んだ氣になる。」と。眞に死んだ氣になれば、死生の念ひもなく、名利の慾もない。斯くて、始めて、正しい思案もあり、立派な仕事もある。

將た、何ものをも恐れない勇氣もあつて、這般の勇氣の中にこそ、却つて、安全の道がある。

吉隆が、石田三成にいつた言葉に、

『肝要は、貴殿の心でござる。必らず死なうと思へば、萬に一つも生きるが、生きやうと思へば、必らず死ぬものでござる。貴殿は、才覺は餘りがあるけれど、一大事の所が缺けてをる。』とあつた。亦た、この意に外ならぬ。

六の廿一　積善の家には餘慶あり積不善の家には餘殃あり　（易經）

子孫の爲めに金を積むのは、寧ろ、德を積むに如かぬ。精々、人に善を施して置けば、施された者、施された者の子孫、これを記憶して、施した者の子孫に報ゆるは必然である。財産などは、あてになる者ではない。

石田三成の謀將島左近が、まだ浪人をしてゐる頃、困窮の餘り、吉野

邊の親族の金を持つた者に、再三、借金を申し込んだが、親族は、大の吝嗇漢で、人を救ふ心などは微塵もなく、その都度、拒絶した。左近はこゝに一計を案じ、辯舌の達者な者をやつて、

『今度、これこれ、金子が要る。御無心申したいけれど、強ひては願はぬ。親類の誼みとして、貴家の爲めに申し進めるのぢや。凡そ、金銀を人に分ち與へる者は、子孫長久、家繁昌、凶事の生ずる虞れはない。反對に、人に與へることを吝しむ者は、禍ひを受けること眼前に在る。』といはせた。素より、貪慾な親族は、この言葉に信服して、早速、金を出したとか。

左近の言は、計略に出たのである。親族の慾心を利用して、却つて、慾心を棄てさせたのである。巧妙といつてよい。但し、言中、不動の眞

理がある。天下の富者が、この言に鑑みて、金を積むの德を積むに如かぬことを知るに至るならば、萬民の幸慶、これに上越すものはない。

六の廿二　堪忍五兩（和諺）

人の思慮の深いと淺いとは、能く怒りを忍ぶと否とに於て見ることが出來る。淺慮な者程、よく怒る。怒るべきに怒らず、神色、夷然としてゐる者があるならば、その思慮、必らず、深淵である。

石田三成は、江州石田村の人佐五右衞門政成の子である。年十三、召されて豊臣秀吉の近臣となり、官位を進めて、佐和山二十三萬五千石を領し、五奉行の一人となり、天下分け目の大合戰、關ヶ原の役を惹き起した位ゐで、亦た、一代の人傑である。勿論、淺慮の人ではなかつた。

三成、十八歳の時、正月の乗初に、美々しく装つて、登城する途すがら、馬取りの奴に、無禮な振舞があつた。けれど、三成は、一言の咎めもなく、その日の祝儀を終つて、屋敷へ歸ると、翌日、右の奴を呼び出した。胸に覺えのある奴は、さてこそ、成敗されるのであらう、と覺悟して、三成の前へ出た。

所が意外、三成は、

『これをその方に遣はす。』といつて、黄金十五枚を與へ、

『但し、奉公は罷り成らぬ。』とばかり、特に理由をいはずして、暇を出した。

何等の沈着！　何等の閑靜！　何等の雅量！　何等の寛容！　これが十八歳少年の爲であらうか。古人曰く、

怒る者は、常の情なり。笑ふ者は、測るべからず。

と。三成の思慮も、稍や、測るべからざるに近かつたのである。

六の廿三　人生意氣に感ず功名誰れか復た論ぜん　（魏徵）

人を動かすものは、たゞ一つの誠である。誠を以てする時にのみ、人は、その意氣に感じて、利害を餘所に、爲めに死力を致さんとする。

三成が、始めて水口に封ぜられた時の事である。豊臣秀吉が、

『然るべき家來を得たか。』と尋ねると、三成は、

『島左近といふ者を召し抱へました。』と答へた。秀吉は不審顔に、

『左近は、世に聞えた者ぢや。汝如きに小祿で抱へられる者ではない。可怪しいぞ。』と冷笑した。三成は、

『某の祿は、四萬石でござりまする。その半分の二萬石を與へて置きまする。それ故、留まつてをるのでござりまする。』といつた。

こゝに於て、秀吉は、

『主人と家來とが、同じ祿高といふことは、古來、その例がない。善くも計らつたぞ。左近も、汝の意氣に感じて、大に報ひることであらう。』と激賞し、後ち、左近を召して、

『治部少輔と相談して、天下の政道にも心をつけよ。』と勵まし、與ふるに一領の羽織を以てした。

左近は、勿論、三成の意氣に感激した。傳へ聞く者、亦た、感激せざるを得ぬ。三成の如きは、善く人を遇する者といつてよい。

六の廿四　回やそれ庶いか屢ば空し　（孔子）

忠臣の眼中には、君があつて、身はない。國があつて、家はない。君賜ふ所の俸祿を擧げて、君國の爲めに使ひ盡すのは、當然の事で、蓄財の意などは、萬、なかるべきであるが、今の大官連中は、在朝數年、往々にして、富巨萬を致す。奇とすべし！

三成は、常にいつた、

『奉公人は、主人から給せられた物を、一ぱいに使つて、殘してはならぬ。殘すのは、盜人ぢや。使ひ過して借金するのは、愚人ぢや。』と。三成の如きは、それ、忠臣たるに近いか。

六の廿五　才に任せて爲すことは危くして見てをられぬものぞ

（西郷南洲）

才、甚はだ結構である。學問、知識を缺いた才、精神の充分修養されてゐない才、德に伴はない才は、多く貴ぶに足らぬ。

或る年の暴風雨に、淀川が溢れて、諸所、堤防が崩れた。斯くと見た奉行三成は、急に京橋口の米藏を發いて、數十百俵を出し、百姓に命じて、それを運んで、壞れた個所を塞がせた。

間もなく、雨が止み、水も退いた。三成は、又復、百姓に命じて、『早々、土俵を造つて、米俵に代へよ。米俵は、汝等に遣はし置く。』といつた。百姓は、爭つて土俵を運んだ。忽ちにして出來上つた新堤防は

前に倍して堅實であつた。

三成の機に投ずる才は、常に斯くの如くであつた。學問は如何？　乃至、德は如何？　百姓の慾心を利用して、堤防を修築したこと、巧は巧ながら、君子の取らない所である。畢竟、德を以て人を使ふ用意がなかつたので、才人には、概して、この缺點がある。三成、勿論、一個の人傑ながら、尙ほ大に、修養しなければならなかつたのである。

六の廿六　その人と爲り小しく才ありて未だ君子の大道を聞かず則はち以てその軀を殺すに足るのみ

（孟子）

才は、用である。德は、体である。体があつての用である。德があつ

ての才である。才のある者は、更に遡つて、徳を養ふのでなければならぬ。

三成は、平生、學問が好きで、諸藝に通達してゐたが、この上にもと藤原惺窩を聘せんとし、惺窩も、これに應ぜんとして、果さなかつた。

これに由つて觀れば、三成は、才を恃んで、學問を怠る小才子の類ではなかつた。若し、惺窩に學んで、徳を養ふことがあつたならば、關ケ原の失敗には至らなかつたであらう。可惜の極みである。

六の廿七　怒る者は常の情なり笑ふ者は測るべからず（魚朝恩）

古歌にこれあり、

底干なき、淵やは騒ぐ、山川の、
淺き瀬にこそ、あだ浪は立て。

と。亭た、この意である。

三成が、大阪城内の一室で、頭巾を冠つた儘、火にあたつてゐると、これも五奉行の一人なる淺野長政が來て、

『只今、内府（徳川家康）が通られる。その樣は、餘りに無作法でござらう。』と、三度迄も注意したが、三成は、知らぬ顔して空嘯いてゐた。長政は、腹立ち紛れに、三成の頭巾を取つて、火中へ投じた。けれど、三成は、怡然として、顔色をさへ變へなかつた。

流石は三成、常人とは、餘程、思慮深い所があつたのである。

六の廿八　無用のものは鐚一文でも高い　（セネカ）

「無用のものは、鐚一文でも高い。」而も、何を無用とし、何を有用とするかは、人による。我々は、實際、無用のものを、有用のものとして、爲めに、餘計な金を費してはゐないか。

五奉行の一人として、將た、豐太閤の寵臣として、世に時めく三成、その日常生活も、定めて豪奢なものであらうとは、當時、何人もの想像する所であつた。所が、事實は然らず、彼の佐和山城の如き、城内、どこを見ても、壁は荒壁の儘で、上塗りはせず、毎室、板張りを以てし居間の襖、障子には、反古紙を用ひ、庭中にも、樹木を植ゑるとか、泉水、築山を設けるとかの物好きはなく、手水鉢に充てたのは、粗末な自

然石であつたので、見る者は、何れも、案外に思つたとか。

吾等も、聞いて案外に思ふ。これに比すれば、我々一般人の生活こそ却つて、豪奢に過ぎぬか。無用のものを有用のものとしてゐる點が、如何に多いかを、篤と自省すべきであらう。

六の廿九　堂々たるかな張や與に並びて政を爲し難し　（曾子）

打ち見た所、堂々たる君子である。就いてこれと語れば、頭は侤侗無一物、たゞの小人に過ぎない——世には、斯うした贋せものが多い。

三成の曰くに、

『犬や猫にも、虎に似た斑のあるのがある。けれど、人が珍重せぬのは

事實、虎でないからぢや。人間にも、智慧で飾つた紛れものがある。君子でないから、識者は、重寶からぬ。但し、愚人のみは、往々、これに欺かれる。』と。

贋せもの丶目的は、元來、愚人を欺くに在るのであるから、識者が重寶からずとも、少しも遺憾はないのかも知れぬ。咄！

六の三十　この心を擧げてこれを彼れに加ふるのみ　（孟子）

士は、各の、その主の爲めにする。敵となり、味方となるも、その忠たるに至つては一である。宜しく、己れ、己れの主を思ふ心を擧げて、彼れ、彼れの主を思ふ心に加へ、彼れに同情すべきである。敵たること を理由として、妄りに惡み、妄りに怒り、些かの同情をも寄せないのは

偏狹に過ぎる。否、冷酷に過ぎる。

關ヶ原の役、三成は、諸將を督して、先づ、伏見城を攻略した。時に城將鳥居元忠の茶道に、神崎竹谷といふがあつた。味方の運命、既に窮まつて、元忠も、最早最期といふ折柄、大勢の中に駈け入り、散々に斬つて廻つた。石田方の兵等は、折り重つてこれを生獲し、斯くと、三成に注進した。三成は、竹谷を召し出して、伏見城始終の事を問ひ、元忠の忠死が、世にも類ひのないものであることを知ると、感動の餘り、竹谷に向つて、

『元忠の息新太郎忠政は、今しも、關東に在つて、父討死の樣を、嘸、覺束なく思つてをるであらう。汝は、急ぎ下つて、合戰の次第を語り聞かせよ。』といひ、命を助けた上に、傳馬に乘せて、伏見を發足させた。

三成は、敵の忠義に同情した。然く同情した事に依つて、吾等は、三成の忠臣であつたことを知る。

七の一　商人利を重んじて離別を輕んず　（白樂天）

利の爲めには、妻子との離別をさへ忍ぶ。他人に對する、義理、人情が何であらう？　世には、斯うした商人が多い。斯うした商人に聞かせたいのは、佐野四郎右衛門の事である。

伏見城主鳥居元忠以下の首が、大阪へ渡つた時、諸將の評議に、『元忠は、家康に代つて、上將の權を執り、剩へ、無双の忠死を遂げた者ぢや。その首、粗末には扱はれまい。』とあつて、特に公卿台に載せ、禮を厚くして、京橋口に梟した。

時に、四郎右衛門は、京都の呉服屋で、平生、元忠の恩顧を受けてゐた者であるが、斯くと聞くと、急ぎ大阪に下り、番人を賺して、元忠の

首を盗み取り、終夜、京都へ馳せ歸り、弟が、僧になつて、百萬遍の寺中に在るを幸ひ、これに謀つて、密かに葬つた。

大阪では、忽ち、詮議が喧ましくなり、大阪、京都を始め、附近の町々、村々へかけて令を發し、首盗人の捜索を始めた。

こゝに於て、四郎右衛門は、つくづく考へた。

『最早、免れぬ運命ぢや。然し、他から露見したのでは、殘念ぢや。自首するに如くはない。』と、三成の屋敷へ出て、刑を請うた。然るに、三成は、仔細を聞いて、四郎右衛門の義勇に感じ、罪を宥して、引き取らせた。

身を鼎鑊に入れて、元忠平日の恩に報ひた四郎右衛門の義勇は、士の事としても、希有に近い。況して、尋常商人の及ぶ所ではないが、亦

た以て、彼等が利益一點張りの下劣根性を戒しむるには足らう。

三成が、四郎右衛門の罪を問はなかつた一擧、これ亦た、非常としてよい。

七の二　道理の命ずる所に從つて怒りを制することの出來る人はこれを勇者といつてよい　（プレトー）

人間、ひどく立腹するとか、非常の困難に出遇ふとかすると、是非、善惡の辨へもなくなり、世の爲め、人の爲めなどは、一切、頓着しなくなる。斯かる際にも、よく冷靜に、以て道理に從ひ得るのは、たゞ勇者の事である。

關ヶ原の役に、細川藤孝は、東軍に屬したが、自分と共に、古今集の

傳授の亡びることを憂へ、飛脚に托して、京都へ上せやうとした。然るに、西軍では、西國各地に關を設けて、人を通さず、飛脚の者は、大に困却した。すると、三成が聞いて、

『古今の傳授とあるのを、通さぬのでは、末代迄、不道の名を得るであらう。縱し、藤孝の僞りであらうとも、苦しうない。早々、通し遣はすやう。』との差圖をした。

古今集の傳授——それは、勿論、貴重なものであらう。それが亡びたのでは、國家の大損失であらう。敵方についた藤孝を惡み怒るの餘り、國家の損失をも顧みないやうならば、三成、到底、小丈夫たるを免れない。けれど、三成は、斯かる際にも、尙ほ且つ、道理に從ふことを知つてゐた。彼れは、確かに勇者であつた。

ゼの三　これその不可なるを知りてこれを爲す者か（論語）

成敗は、天である。苟くも、これを爲すの仁たり義たるを認むる以上成敗を度外に措き、敢然として事を擧ぐべきである。成敗を慮つて、袖手無爲に終る者は、畢竟、志がないのである。

關ヶ原に一敗した三成は、何卒、鎭西に赴き、島津氏と共に、再擧を謀らんものと、諸所を間行し、食を斷つこと一兩日、稻穗を拾つて、飢ゑを凌ぐに至つた。爲めに胃腸を損じ、下痢を患へ、江州淺井郡脇坂の葦原の中に、鎌を腰に挿し、破れ笠で面を掩ひ、樵夫の姿で臥てゐる所を、田中吉政の配下の爲めに捕へられた。吉政は、豫ねて相識の仲とて

井の口に於て、三成に對面し、最も慇懃に挨拶した。三成は、面色、常の如く、

『言語に絶えて殘念ではある。然りながら、これ皆、太閤への報恩の爲めと思へば、然迄の遺憾もない。』といひ、秀吉與ふる所の貞宗の脇差を取つて、吉政に贈り、以て記念とした。

成敗を以て三成を論ずる者は、輕擧妄動、却つて豐臣家に禍ひする者とし、惡しざまに罵るの例である。然らば、東軍に走つた諸侯は、皆、豐臣家に忠であつたか。結果は左に右、三成が忠義の志は、到底、これを認めずばなるまい。

然り、三成は、忠義の爲めに起つたのである。豐臣家を憂ふる一片の至情、已むに已まれずして、事を擧げたのである。成敗の如きは、豫

め期しなかつたに相違ない。その吉政に語る所は、吾等をして、伯夷、叔齊を評した孔子の語を想ひ起さしめる。孔子曰く、

仁を求めて、仁を得たり。又た何ぞ怨みん。

と。以て三成を評するは如何？

七の四　死して後ち已む　（論語）

人間、苟くも一息の尚ほ存する限りは、爲すべき仕事があり、盡すべき義務がある。輕々しく事を見限り、輕々しく死を決するのは、大丈夫の事ではない。

やがて、三成は、大津へ護送せられた。家康は、本多正純に命じて、警衛させた。正純は、三成が、自害も得せず、召捕られた事を嘲つた。

三成は、大に怒つて、

『腹を切つて、人手にかゝるまいとするのは、葉武者の事ぢや。　源頼朝が、石橋山の戰ひに敗れて、朽木の洞に潜んだ心持ちは、汝には解るまい。大將の道は、語つても無益ぢや。最早、これ迄ぢや。』とばかり、復た口を開かなかつた。

智者といはれた正純も、こゝに於てか、顏色なしである。

七の五　運命の循環は水車よりも速い　（ドン、クキソー）

幸福も、喜ふに足らぬ。惡運も、悲しむに足らぬ。彼れも、此れも、たゞ一時のものである。

三成の外、小西行長、安國寺惠瓊も、同じく、東軍に捕へられた。家康は、三人に小袖を各一襲ねづつ與へた。行長は、

『寒さを凌げとての御賜もの、忝く存じまする。』と謝した。惠瓊は、早速、着用した。三成は、

『何れよりか。』と問ひ、

『上樣よりでござりまする。』

『上樣とは？……』

『內府樣でござりまする。』と答へると、

『さてさて、上樣は、つひこの間、御他界なされたに、早や、內府を上樣といふか。』と長大嘆息し、手にも取らなかつた。

「運命の循環は、水車よりも速い。」然ればこそ、秀吉の辭世にも、「なにはの事は、夢の世の中。」の句があつたのである。人生の榮華は、夢に

過ぎぬ。昨日迄、豊臣家を謳歌した者が、今日、徳川家を頌讃することは何の不思議があらう？　三成は、這般の理を知らなかつたか。彼れ、智者ではあつたけれど、まだ、年が若かつた。

七の六　勝敗は時の運　（和諺）

事の成ると成らないとは、或る程度迄、「時の運」である。成功、必らずしも、誇るに足らぬ。失敗、必らずしも、恥づるに足らぬ。

家康は、三成を呼び出して、

『如何なる武将にも、斯かる例しは多い。恥ぢではない。』と、慰め顔にいつた。三成は、露、臆した氣色はなく、如何にも打ち解けた体で、

『たゞ、天運の然らしむる所でござる。疾く疾く、首を刎ねられよ。』と

いつた。

後ち、家康は、

『三成は、流石、大將たるの器量を備へてをる。平宗盛とは大きな違ひぢや。』といつたとか。

であるから、成敗を以て人を論ずることは、返す返すも、慎しむべきである。

七の七　死生を取つて餘事に附す　（吉田松陰）

英雄、偉人の大事を心がける者は、念頭、たゞその大事があるばかりで、死生の如きは、夙に餘事に附してゐる。

從つて、運命既に窮まり、死の旦夕に迫る迄も、死を思はずして、大

事を思ひ、大事の爲めに、身を大切にする。三成が、自害を敢へてせずして、捕虜となつた所以である。

而も、それのみではなかつた。六條磧へ首を斬られに行く途中、三成は、湯を求めた。警固の者が、

『湯は、ござりませぬ。喉がお乾きなら、この甘干柿を召し食れ。』と侑めると、

『それは、痰の毒ぢや。食ふまい。』といつた。聞く者、大に笑つて、

『今、首を斬られる人が、毒斷ちは可怪しい。』といへば、三成は、

『汝等如きには、然う思はれるのも道理ぢや。けれど、大義を思ふ者は首を刎ねられる時迄も、命を大切にして、何卒、志を遂げたいものとそればかりを心がける。この心持ち、汝等には解るまい。』毅然として斯

ういつた。

斯くて、首の座へ直つて後も、顏色、常の如くであつたといふ。

三成の念頭には、大事があつて、死生がなかつたのである。曾子の曰くに、

士は、以て弘毅ならざるべからず。任重くして、道遠し。仁以て己れが任と爲す。亦た重からずや。死して後已む。亦た遠からずや。

三成の如きは、一個、弘毅の士といつてよからう。

七の八　自ら恃め　（ラ、スチンテーヌ）

何一つ、恃み得るものはない。強ひて求むれば、自分自身か。實力の優れた者は、財産はなくとも、門閥はなくとも、空拳赤手を以てして、

尙ほ能く、大事業を成すに堪へる。例へば、豊太閤の如くである。又た例へば、太閤に仕へた小西行長の如くである。

行長は、泉州堺の藥種商壽德の子である。初め、彌九郎と稱し、備前岡山の富商小西某に養はれ、常に、岡山城主宇喜田直家に出入し、直家の命に依つて、秀吉に適き、織田信長の引見する所となつた。直家は、行長を京都に置いて、行人とした。秀吉は、深く行長の才を愛し、召して祿二百石を與へた。行長は、爾後、屢ば戰功あり、次第に官位を進めて、攝津守に任じ、肥後半國二十四萬石に封ぜられ、宇土に居城した。

秀吉は、水呑百姓の子から起つて、天下を掌握した。行長は、一藥種商の家から出て、一城の主となつた。何れも、恃むに足る財産、門閥があつて、然く成功したのではない。たゞ、己れの實力を以てしての事で

ある。

孟子曰く、

文王を待つて興る者は、凡民なり。

と。文王を恃むすら、凡民である。財産を恃み、門閥を恃むが如きは俗物の事である。人間、眞に恃み得るもの、自分を措いて他にはない。

七の九　飽食煖衣逸居して教へなければ禽獸に近し

（孟子）

古來、英雄とか、偉人とか稱せられる人が、殆ど蓄財に意がなかつたのは、何故か。この世界には、金錢以上に、より貴いもののあることを知り、それが爲めに專心一意して、蓄財如きに努力を費す餘裕がなか

うたのである。

堺の町人が、行長を評した言葉に、

『小西攝州は、肥後半個國を領して、知行を三十萬石も取りながら、まだ、一貫目の銀子も溜らぬげな。長崎の陶安は、知行とては取らぬけれど、十貫目も持つてをる。して見ると、武士程詰らぬ者はない。』とあつたとか。

蓄財をのみ能事とする町人の評は、然ることながら、吾等は、行長が一身の爲めに金銀を蓄へなかつたことに於て、その英雄たる所以を見るのである。

七の十　曲れば全し　（老子）

鋭い刃は、こぼれ易い。堅い革は、裂け易い。人に無禮を加へられて忍ぶことが出來ず、起つてこれと爭ふのは、人情の常であるが、これ、身を全うする所以ではない。侮られたら、侮られた儘、辱しめられたら辱しめられた儘、ぢつと曲つてゐるのが、所謂る明哲保身の道である。

加藤清正には、左右、行長を侮る風があつた。征韓の役に、兩人相並んで、先鋒を命ぜられると、清正は、行長に向つて、

『今度、自分は、妙法蓮華經の旗を賜はつたので、朝鮮は勿論、大明迄も、この旗を飜して、日本の國威を輝かす心組ぢや。貴公は、どんな旗を使はれる？』と、意氣傲然として問うた。行長は、取り敢へず、

『自分は、元と、堺浦の藥屋ぢやから、紙袋に朱丸でも書いて、それを旗にしやうよ。』と答へた。さしもの清正も、稍や張合抜けの体であつた

とか。

行長をして、世の常の人であらしめたならば、清正の大言壯語に酬ゆるに、同樣、大言壯語を以てし、これと相拮抗すべく試みたであらう。その結果、清正をして、意氣、益す强硬ならしめ、勢ひの赴く所、或ひは爭ひを惹き起したかも知れぬ。行長は、清正自慢の跳題目の旗に對するに、紙袋の旗を以てし、敢へて拮抗しやうとせずして、極度に下手に出た。斯くては、清正も、その鋭氣を用ひることが出來ぬ。重ねて行長を侮ることは出來ぬ。古歌に、

負けて退く、人を弱しと、思ふなよ。
智慧の力の、强きなりけり。

智慧者の行長、流石に、明哲保身の道を知つてゐたか。

七の十一　形を宇内に寓すること復た幾時ぞ　（陶淵明）

ほんの蜉蝣の一期である。生も、喜ぶに足らぬ。死も、悲しむに足らぬ。死に臨んで、悲痛が狀があるのは、人生を知らないのである。

關ヶ原の役に、行長は、西軍に屬して、種々、献策する所があつたが石田三成は、用ひるに至らず、戰ひ半日、忽ちにして失敗した。その前夜、行長は、家の子、郎徒を會して、

『臆病者に與して、犬死すること、殘念ぢやが、今となつては、仕方がない。汝等も、前世の約束と思ひ切り、華々しく最後の戰をして、速かに討死し、名を後代に留めよ。いざ、これを限りの酒宴をしやう。』と、酒を酌み交し、亂舞などをして、打ち興じた後に、部署を定め、夜の明

けるのを遲しと待つた。

翌くれば、慶長五年九月十五日、果然、味方の敗となつた。行長は、東軍の捕ふる所となり、十月朔、三成と共に、六條磧に斬られた。死に臨んで、顏色、常の如くであつたので、見る者は、何れも、その膽力に服した。

人の死を迎へるは、行長の如くにありたい。愉快に、沈着に、大膽に迎へたい。然らざれば、識者は、以て人生を知らぬ者とするであらう

七の十二　古へを以て鏡と爲さば以て興替を知るべく人を以て鏡と爲さば以て得失を明かにすべし（眞觀政要）

前人の事は、すべて、後人の鏡である。但し、見方にもよる。單に、自分に關係のない前人の事として、漫然、見て止むのでは、それは、鏡の用を爲さぬ。身を前人の地に置き、己れに引き當てゝ、前人の心情を思ひやつてこそ、前人の事、即はち、後人の鏡である。

下野國佐野城主天德寺了伯は、初め、北條氏に屬し、後ち、豊臣秀吉に仕へて、驍勇の名があつた。或る時、琵琶法師を招いて、佐々木高綱宇治川の先陣、那須宗高扇の的の二曲を聞き、頻りに獻欷流涕した。後日、家來たちに、

『この程の平家は、何うであつた？』と問うた。家來たちは、

『大層、面白うございました。たゞ不思議は、殿樣のお泣きなされた事でございまする。』といつた。了伯は、溜息を吐いて、

『さてさて、恃み甲斐のない事をいふ。考へても見るがよい。高綱にして、先陣を得せず、人に先を越され、宗高にして、扇の的を射損じて、平家の笑ひを買つた位なら、二人共、その塲を去らず、切腹して果てたに相違はない。その悲壯な志を思ひやれば、哀れさいはん方もない。武士の心をも察せずに、たゞ面白いとのみいふ。さてさて、心のない人たちではある。』といつたとか。

即はち、前人の事を見る、この了伯の如くに見ればよい。

七の十三　三軍も帥を奪ふべし匹夫も志を奪ふべからず（孔子）

人間、志を貴ぶ所以は、何ものを以てしても、これを奪ひ得ざるに

在る。奪ひ得るのは、志ではない。

長湫の役後、豊臣秀吉は、徳川家康の士井伊直政の武勇を愛して、これを饗應し、直政の舊同僚石川出雲守數正に、接伴を命じた。直政は、一見、面を背けた限り、口をも利かず、尋いで、秀吉自身、茶を供するに及び、乃はち、傍らを顧みて、

『これなる數正は、譜代相傳の君に背いて、他家に仕へる大臆病者でござる。直政に於ては、彼と同席すること、眞つ平に存ずる。』と罵つた。

秀吉の籠絡手段も、直政の志を奪ふには足りなかつた。これ、志である。

七の十四　亦た仁義あるのみ（孟子）

士の世に處する、志す所は、たゞ仁義の二字に在つて、富貴や貧賤や、威武や、死生やは、その全然顧みない所である。

長篠の役に、織田信長から、德川氏の士内藤正成へ使者があつて、『德川勢の先陣を下知せよ。』といつて來た。正成は、憤然として、『我々の主人は、先陣の事などに就いて、他人の下知を仰がれる人ではない。』とばかり、その使者を追ひ返してしまつた。

正成は、たゞたゞ、主人家康あることを知つて、他を顧みなかつた。士が、仁義、道德あることを知つて、他を顧みない狀は、猶ほ、斯くの如くである。

七の十五　その君に非ざれば事へず　（孟子）

同じ聖人でも、伯夷は、「その君に非ざれば事へず。」といふ風であり、伊尹は、

何れに事へてか君に非ざらん。（孟子）

といふ風、柳下惠は、

汚君を羞ぢず。（同）

といふ風、そして孔子は、

以て處るべくして處り、以て仕ふべくして仕ふ。（同）

といふ風であつたといふ。何れが善くて、何れが惡いと、一概にはいはれない。四人、その性格、その行き方をこそ異にしたが、その聖人たるは一である。

正成は、主人家康の以て家中の弓箭柱とした人であるが、主家が關東

へ移された初め、内々、知行割りの詮議のある事を聞き込み、その人名禄高をさへ知ると、

『功臣ばかりかと思つたが、然うでないらしい。殿は、男好きをされるのぢや。甚はだ以て、面白くない。』といつて、その私仰なる武州萱間へ退隠し、髪を剃つて、善想と號し、一生涯を送つた。尤も、家康の寵愛は、舊の如くで、放鷹の時には、必らず立ち寄り、手づから獲物を與へ時には食事をしたりした。

正成の潔白は、伯夷に似てゐる。これを頑固、偏狹とのみ見てはならぬ。伯夷もよい。乃至、孔子もよい。一方を取つて、他方を捨てることを却つて、これ、偏狹の沙汰である。

七の十六　働くより工面（和諺）

働くのはよい。無闇に手足を動かしたとて、効果のあるものではなく却つて、徒勞に歸することが多い。宜しく、僅かの勞力を以て、多くの効果を擧げるやうの工夫があるべきである。

前田玄以は、豊臣秀吉五奉行の一人である。嘗つて京都所司代を勤め市中を巡見中、東寺の邊で、道に横はつてゐる牛車を見ると、以ての外に立腹し、

『所司代の通行を妨げるとは、奇怪至極ぢや。それ、斬つて捨てよ。』と嚴命した。從者は、已むなく、その牛を斬り殺した。これを見聞する者は、以て亂心の爲として縮み上り、何れも、玄以を恐れて、假初の曲事

をも相戒しめた。

斯くて、玄以は、所司代在勤中、僅かに牛一頭を殺したばかりで、訴訟事も少く、人を刑したこともなく、京都の靜謐を保つことが出來た。

玄以は、元と、尾州小松原寺の住職で、秀吉と舊交あり、學問、歌道に通じ、餘程の智者であつた。勿論、亂心してゐたわけではなく、僅かの勞力を以て、多くの効果を擧げ得んが爲めに、市中に牛を斬るやうな亂暴な眞似をしたのである。何人も、這般の工夫がなくてはならぬ。獨り、人を治める者のみの事ではない。

七の十七　理に當りて後ち進み勢ひを審かにして後ち動く爲さゞる所ありて成らざるなき

を成すなり　（陳龍川）

勝ちを貪る者は、無理な事をも敢へてする。無理は通らない。無理を廢めて、自然に從ひ、こゝぞ大丈夫といふ所に於て、手を着ける。これを全勝の策とする。

黑田孝高は、初め、織田信長に仕へ、後ち、豐臣秀吉に從ひ、竹中重治と相並んで、智謀の名あり、陳平、張良に比せられた人である。嘗つて、その子長政に敎へて、

『若い者は、懲りる事が必要ぢや。懲りねば、思慮は練れぬ。左右は、終りの勝ちを心がけよ。勝つことばかりを思ふと、却つて失敗する。良き大將は、或る場合に、緩漫に見えることもあるけれど、輕卒な戰をせ

ぬから、終りの勝ちを全うするのぢや。』といつた。亦たこの意である。

七の十八　狡兎死して走狗烹らる（韓信）

必要のある間は、賞めもし、おだてもして、優遇欵待、至らざる所がないが、必要がなくなると、秋の扇、夏の巨燵と棄てゝ顧みない。人間は、輕薄なものである。

京都の長谷川宗仁よりの飛脚が、孝高の許へ、本能寺の變報を齎らした時、豊臣秀吉は、

『その飛脚が、他言でもして、敵方へ洩れたら、都合が惡からう。急ぎ殺されよ。』と命じた。けれど、孝高は思つた、

『彼れ、一日半に六十里を來た事、まことに、天の使ひぢや。殺すべきの科はなく、早く來たといふ功がある。』と。乃はち、我が陣へ隱して置いた。

人間の行爲、輕薄程惡むべきはない。この一擧、我々の學ぶべきは、秀吉でなくして、孝高である。

七の十九　金錢は肥料と同樣撒かなければ用をせぬ（ベーコン）

溜める一方で、使ふことのない金は、石、瓦も同然である。これを稱して、金を殺すといふ。直接に、金を殺すのは、間接に、人情を殺し、人間を殺すのである。殺生戒の大なるものでなければならぬ。

日根野織部正高吉は、孝高から銀子二百枚を借りて、朝鮮へ出征し、歸ると、禮心に、百枚を加へて、孝高の許へ返しに來た。孝高は、近習

を呼んで、

『先刻到來の鯛を三枚に下して、中落ちを吸物にして、織部殿へ差し上げ、自分へも出すやう。それから、身は、味噌漬けにして置け。』と命じた。高吉は、内心、その客嗇に驚きながら、件の銀子を返さうとすると

『出陣の仕度にとて、用立てたのぢやから、元々、返濟を受ける心はない。』とばかり、斷じて受けず、

『強ひて置いて行かれるやうなら、今後は、面會致すまい。』と迄極言した。高吉も、せん術なく、その儘、銀子を持ち歸つた。

孝高のこの處置、一つは高吉の奢侈を誡しめる老婆心に出たのではあつたが、その儉約は、毎々、斯くの如くであつた。

それは、儉約であつた。客嗇ではなかつた。孝高は、よく積んで、よく散じ、決して、金を殺すの殺生をしなかつた。以て、世間の金溜め屋を誡しめるに足らう。

七の二十　無用の用（莊子）

有爲の材を懷く者は、往々、他人の忌み憚る所となり、不測の禍ひを蒙る。有爲を以て、無爲に隱れ、有用を以て、無用に去るのも、時に取つての處世法である。これを「無用の用」といふ。

豐臣秀吉、一日、近臣に向つて、孝高の智謀を激賞し、

『予の死後、天下を取る者は、恐らく、彼の跛者であらう。』といつた。

或る人が、この由、孝高に告げると、孝高は、驚き顏に、

『南無三寶、それこそ我が家の禍ひぢや。』とばかり、髮を削つて、如水

と號し、復た功名に意なきを示した。

孝高は、無用の用を知つてゐた。これ、自ら無用の地に去つて、天年を終へやうとしたのである。

七の廿一　忠信にして祿を重くするは士を勸むる所以なり　（中庸）

右に忠信、左に重祿——これならばよい。單に、祿を重くすることによつて、人心を得やうとすれば、人の慾心を勵まし、利の爲めに義を失はしめて、却つて、人心を失ふの結果を致す。

孝高が、豊臣秀吉を評した言葉に、

『秀吉公は、諸侯に加增を行ふにも、國郡を多く加增し、又た、自分取

立の恩をあり難がるやうにと、俄大名を作り立てなどせられる。それによつて、誰れ一人、下知に背く者はないけれど、畢竟、慾の爲めに義を失ふ者に似てをる。斯くては、愈よの場合、眞實、秀吉公へ一味の志のある者はあるまいとあつた。

然り、忠信、即ち、誠を以てするのでなければ、眞實、人心を得ることは出來ない。』のである。

七の廿二　功遂げて身退くは天の道なり　（老子）

韓の張良は、功成り、名遂げて後ち、

願はくば、人間の事を棄てゝ、赤松子に從つて遊ばんのみ。

といつて、病ひを謝し、穀を避けた。物、盛んなれば衰へる。久しく

功名の地に在るのは、不祥である。張良は、この事を知つてゐた。

張良に比せられた孝高も、やはり、この事を知つてゐた。孝高は、豊臣秀吉から、豊前の六郡、十萬石に封ぜられ、中津城に住したが、關ケ原の戰功に依つて、更に領地を賜はるべき旨、德川家康から内命があると、

『某事、最早、老年に及び、殊には病人の事とて、精力も、いたく衰へをりまする。既に、愚息甲斐守に筑前を下し置かれる上は、彼れの養育を受けて、安樂に餘生を送りたう存じまする。官祿の望みは、些かもございませぬ。何卒、身の暇を賜はり、煙霞、山水を友に、逍遙自適することが出來ますれば、これに上越す幸ひはございませぬ。』と挨拶した。家康は、深く感心して、

『如水こそは、今の世に處して、古へを行ふ者ぢや。』といつたとか。

まことに、孝高は、戰陣の謀に於ても、處世の術に於ても、漢の張良に比せらるべき智者であつたのである。欽すべきかな！

七の廿三　政を敷くこと優々たり　（詩經）

人を責める者は、必らず多少の怒氣を含む。自然、その責め方に、猛暴、迫促の迹あるを免れない。たゞ非常の人のみが、優々として人を責め、その悔改を待つのである。

孝高の草履取に、龍若といふがあつた。平生、惡戲氣をするので、孝高は、命じて柱に縛りつけさせた。伽の者が心配して、詫びをしやうと思つてゐると、孝高は、龍若を二里ばかりの代官の許へ使ひにやり、瓜

を取り寄せ、内の二つを取つて、

『食へ。』と、龍若に與へた。龍若は勿論、伽の者も、最早、免された事と安心してゐると、然うではなくて、龍若が瓜を食ひ終るのを待つて、孝高は、再び、元の通りに縛らせた。稍やあつて、掃除などをさせては復た縛り、復た使ひ、復た縛りして、三日ばかりの後、始めて免した。

伽の者は、少がらず驚いて、

『さてさて、稀らしい御折檻でござりまする。』といつた。孝高は、

『惡戯者故、敎への爲めに縛つた。縛り詰めたのでは、手に繩の迹がつく。時々休ませ、用もさせて、緩々と折檻したら、懲る所も深からう。』

と笑つたとか。

まことに、稀らしい折檻ぶりではあつた。凡人には、難かしい。孝高

が、悠々不迫の非常人であつたればこそである。而も、これでなければ人を責めて、悔ひ改めさせることは出來ぬ。

七の廿四　勤むれば匱しからず　（左傳）

晝働かない者は、夜盗む。夜盗むのも、晝働くのも、共に金を得る手段であるが、彼れには刑罰があり、此れには富貴がある。智愚如何？

孝高は、家中に無奉公の者があると、その頭を呼んで、

『たわけめ、晝盗みの仕様を知りをらぬ。今後は、精々心がけて、晝盗みをせよ、と異見してやれ。』と指圖した。律義に奉公せよ、忠實に働けとの心である。働く者には、主人の恩賞がある。知行を增される。これ公々然と、主人のものを盗むに等しい。さては、斯くと指圖したのであ

る。

それにしても、「晝盜み」は面白い。

七の廿五　人を殺すことを嗜まざる者能くこれを一にせん（孟子）

人を殺すことを嗜まないのは、仁愛の德である。この德、以て天下を一にするに足る。況んや一家を齊ふるをや、五七十人の部下を服するをや、朋友、知人と交はるをやである。

孝高の家で、作事場のこけら、木の端などを盜む者があつた。役人が搦め取つて、手柄顔に、孝高へ訴へた。孝高は、

『追つけ、首を斬るであらう。その儘、縛つて置け。』と命じた。けれど

幾日經つても、その沙汰をせぬので、留守居の者、作事奉行、共々、孝高の前へ出て、日夜、番人を附けるなど、手數のかゝることを理由に、

『今朝、首を斬らせませうか。』と催促した。孝高は、大喝一聲、

『たわけたことを申すものぢや。』と叱りつけ、

『人を殺すといふは、容易の話ではない。その方等は、何とも思はぬと見える。早々、免し遣はせ。盜まぬやうにするのが、奉行の役ぢや。默つて盜ませて置いて、首を斬るとは、以ての外をいふものぢや。』と、却つて役人の手ぬかりを誡しめた。

こんな風であつたから、孝高一生の間、家中に切腹を命ぜられた者もなく、何れも、一生を安樂に送つた。

孝高の仁愛は斯くの如くであつた。豐臣秀吉が、以て、己れに代つて

天下を治むべき者としたこと、不思議ではない。「人を殺すことを嗜まざる者、能く天下を一にせん。」であるからである。

七の廿六　再びすればこれ可なり　（孔子）

輕擧は、勿論、避けなければならぬ。といつて、思慮に過ぎるのも、宜しくない。考へてのみゐる中に、その考へが寢入つてしまつて、結局無爲に終る場合が多い。季文子は、事毎に、三たび思つて、而る後ち、これを行つた。孔子は、「再びすれば、これ可なり。」と評した。

孝高の曰くに、

『世間では、犬死を嫌ふ。けれど、犬死を恐れぬ位ゐでなければ、見事な武士の死は遂げられぬ。』とあつた。

といふのが、危急に臨んで、今死ぬのは、犬死ではないか。もつと有効な死に方があるであらう。この場合は、先づ、逃げて置かう、などと分別したのでは、君の爲めにも、國の爲めにも、到底、死なれるものではない。

何事も、たゞ決行に在るのである。

七の廿七　人を使へば苦を使ふ　（和諺）

人を使ふ者は、先づ以て、その事が、一つの苦勞であることを、篤と會得しなければならぬ。自分一人、樂をするとか、利益を貪るとか、我意を張り、我が儘一杯に振舞ふとか、無理からでも服從を強ひるとかするのでは、人、決して、使はれるものではない。「人を使へば、苦を使

ふ。」從つて、事毎に堪忍し、克己自制して、始めて、人を使ふことが出來る。

孝高は、その子長政に敎へて、

『侍を使ふには、第一の傳授がある。自分は、三十を過ぎてから、漸く合點した。夏の火鉢、旱の傘といふことを、よくよく味ひ、堪忍の二字を守らねば、侍は、主人に服せぬものぢや。』といつた。それに相違はない。

七の廿八　優游年を終ゆ　（詩經）

王侯となつて、威儀三千の間に、窮屈な思ひをするのは、野に在つて優游自適の中に、夢の如き五十年を終るのと、その樂みは如何？

孝高は、關ヶ原の役後、家をその子長政に讓り、その身は、福岡城内の三の丸の小高い丘の上に館を構へ、召し使ふ者とては、輕士、斯、夫人の侍女を合せて僅かに十數人、最も質素に、最も閑靜に、好きな連歌などをして、日を送つた。家人どもには、

『道で予に出遇つても、避けることは相成らぬ。』と命じ、城下へ出るにも、若黨に刀を持たせ、斯一人を召し連れるのみであつた。

孝高は、子供が好きであつた。子供等も、自然、孝高に懷き、孝高が出歩くのを見ると、五六歳から十歳位ゐの者が、こゝ彼處から集まつて來て、孝高を中に、ついて歩いた。孝高は、時々、小鳥や菓子を持たせて、子供等に與へ、以て樂みとした。後には、子供等が、館へ來て、

『殿樣、今日も、どこかへ遊びに行きませう。』と誘ひ、出かけないと、

その儘、館へ入つて遊び、障子を破つたり、庭を掘り返したり、盛んに悪戯をした。

孝高は、外出して、疲れると、身分の高下を問はずして、その道に當る家來の宅へ立ち寄り、直ぐ、奥へ通つて、茶を飲みながら、足を休めた。家中の妻子等は、追々、これに馴れて、憚る心もなく、孝高が通ると、下女を出して、

『ちと、お寄り下されませ。』といはせるやうになつた。

名利を餘所にした閑牛涯、まことに、「赤松子に從つて遊ばんのみ。」の概を見る。孝高には、確かに、張良の風があつた。

七の廿九　仁人は天下に敵なし　（孟子）

天下、仁義に優つて強いものはない。一人を以て、萬人を壓し、匹夫を以て、權貴を屈するに足るものは、仁義である。

榊原康政は、年少、德川家康に召されて小姓となり、毎度の戰功に、館林十萬石に封ぜられた人である。初めの名は小平太、後ち、式部太輔と稱した。長滋の役に、豊臣秀吉が、織田家に向つて弓を曳くのを、惡逆無道の至りであるとし、その旨板に書きつけて、諸所方々に建てた。

秀吉は、一見、大に立腹し、

『康政を生捕つた者には、望みの儘の褒美を遣はす。』とふれさせた。

しやがて、兩軍、和が成ると、秀吉は、

『最初の使ひには、榊原を寄越されよ。』と、家康に注文して置いて、京都へ還り、間もなく、康政が上京すると、

『過ぐる日は、一たび汝の首を得て、甘心しやうと思つたが、既に和睦の上は、却つて、汝の志をあり難く思ふ。この儀を告げたさに、特に汝を招いたのぢや。』といつて、欵待の限りを盡し、且つ、

『小平太といふも如何？　叙爵の事に取り計はう。』と約束した。

後ち、康政は、從五位下に叙し、式部太輔に任ぜられた。秀吉の取り做しに依ると傳へる。

吾等は、康政を仁人とはせぬ。けれどその言は、仁義の言であつた。仁義を假りてすら、尙ほ且つ、秀吉を屈するに足る。況んや、自身直ちに、仁義の人であるに於てをやである。彼れには、一切萬事、成し得ないものがないであらう。

七の三十　兩虎共に鬪はゞその勢ひ共に生きず（藺相如）

由來、兩雄は、並び立ち難い。互ひに權勢を爭つて、共倒れになり、禍ひを主人に及ぼすのは、古來、その例が多い。たゞ、君國の急を先にして、私讐を後にするの至誠を存する者のみが、協心戮力、その主を助けるに堪へるのである。

德川家に於て、智謀の才、康政と相類した者に、井伊直政があつた。直政が從軍すれば、康政は安心した。康政が從軍すれば、直政は安心した。康政は、常にいつた、

『自分が、先へ死んだら、直政は、病氣になるであらう。直政が、先へ死んだら、自分の死も、間があるまい。』と。

兩人のみではない。濟々たる多士が、心を協せ、力を戮せて、家康を助けたこと、これ、家康が、能くその志を成した所以である。

七の卅一　功成りて居らず　（老子）

後漢の馮異は、人と爲り、謙退にして伐らず、諸將が、各自の勳功を論じ出すと、その都度、樹下へ屏いたので、大樹將軍の號があつたといふ。

康政は、稍や、これに似てゐた。小田原役後、關東を領した家康は、康政を館林十萬石に封じたが、天下平定の後は、開國の元勳として、寵任最も厚く、水戸二十五萬石に封ぜんとして、酒井忠世に命じ、旨を諭させた。けれど、康政は、固辭して受けず、再命の下るべきを察して、

急遽、館林へ歸つてしまつた。

忠臣の志は、たゞたゞ、力を君國に致すに在つて、一身の利福の如きは、その念とする所でない。この一舉、康政の謙退に併せて、その忠誠を見るに足るであらう。

君の爲めに身を捨つるを忠といふ。親の心に背かずして、善く事ふるを孝といふ。老いたるを敬ひ、士卒を撫育し、國民を憐むを仁といふ。一たび諾して變せず、終始全きを義といふ。謙退辭讓を禮といふ。謀を帷幕の中に運らし、勝を千里の外に施すを智といふ。假にも虛言を構へず信を失ふべからず。遠き慮りなき時は、近ぎ憂あるべし。萬事に愁へず、屈せず。過つて改むるに憚ることなかれ。邪曲、輕薄の人と交るべからず。大酒は、失多し。色情は、身を喪ふ。心のひがむは、嫉妬、偏執の深きなり。儉約を專らとし、奢りを愼しみ、人の非を見て、我が身の行ひを正すべし。我れ愚なる故に、壁書して愼みとするのみ。（楠正成）

八の一　愚者は自ら智とし智者は我が愚を知る

世間、我が愚を知る者はない。我が愚を知らない者は、他人の智をも愚として、下らず、問はず、盲滅法に、我が愚を押し通す。哀れむべし！　（シエークスピア）

堀尾信濃守忠氏といふは、若年ながらも、なかなかの智者であつた。山内一豐は、平生、これと親み交はり、萬端の家事、この人に諮つて、過ちのなからんことを期した。古人は、評して、

『我が及ばぬ所を知ること、先づ以て難かしい。善い人を見知ること、最も難かしく、善い人の言葉を用ひること、更に難かしい。この三つを合せた一豐は、所詮、尋常の人ではない。』といつた。

忠氏の智は、然ることながら、自ら知つた一豊は、忠氏以上の智者であつたのである。

八の二　人生古へより誰れか死なからん丹心を留め取りて汗青を照す　（文天祥）

日に吉凶はなくて、事に吉凶がある。志士仁人は、身を殺して仁を成す。その日、果して凶日か。寧ろ、吉日ではないか。

徳川忠吉は、家康の第四子である。尾張に封ぜられて、清洲城に住した。關ヶ原の役に、歸依の僧明嶺和尚に就いて、出陣の吉日を問ふと、和尚は、故意と凶日を擇んで答へた。忠吉が、その理由を尋ねると、和尚は、

『武將として、戰場に臨む者は、一死、君國の恩に報ゆることを本懷と致しまする。然らば、再び生きて還らぬといふ大凶日こそ、却つて、大吉日でござりませう。』といつた。忠吉は、成程と合點し、乃はち、その日を以て出陣した。

日の吉凶など、問ふを要せぬ。

八の三　吾が老を老として以て人の老に及ぼし我が幼を幼として以て人の幼に及ぼさば天下をば掌に運らすべし　（孟子）

我が老を老とし、我が幼を幼として、これを敬愛するのは、道德の大本である。決して一家庭内の私事ではない。

忠吉の近習に、初めて子を設けた者があつた。忠吉が、

『嘸、可愛いであらう。』と問ふと、

『然うでもございませぬ。』と答へ、問ふこと再三に及んで、固く前言を繰り返した。忠吉は、以ての外に氣色を損じ、

『我が子が可愛くないやうな邪慳な心で、主人に忠義が成るものか。』といつて、直ちに改易したとか。

眞實である。我が子が可愛くないやうな者なら、他は見るを要せぬ。その人、必らず、冷血無骨腸漢である。

八の四　苟くも仁に志せば惡しきことなし　（孔子）

人は、第一に志である。志の正しい者は、學ぶ所が淺くとも、大

した間違ひはせぬ。仁に志す者は、少くも、不仁、薄情な事をしないであらう。勇に志す者は、少くも、卑怯、臆病な擧には出ないであらう。

父家康が、尾張を通つた時、忠吉は、

『何卒、御武功のお話をお聞かせ下されませ。』と請うた。家康は、

『古い話を聞きたく思ふ程の心底なら、それでよい。』といつて、別に話とてはしなかつた。

但し、念々、こゝに在つて忘れないのが、志である。氣紛れに思ひ立つた志は、その實、志ではない。

八の五　孝弟は仁を爲すの本か　（有子）

兄は、弟を愛し、弟は、兄を敬する——兄弟の道は、たゞこれだけである。たゞこれだけの中に、多くの道徳がある。五倫、五常、皆、この中に在る。

であるから、弟として兄を凌ぐやうな者は、その人、必らず、一切の道徳に於て缺くる所があり、到底、人外漢でなければならぬ。

關ケ原の役後、家康は、忠吉の材武を愛し、以て嗣子としやうとして諸將佐に諮つた。諸將佐も、心を忠吉に屬して、盛んにその武功を稱揚したが、たゞ一人、大久保忠隣のみは、極力、これに反對し、遂に、その議を排斥した。忠吉は、啻に怒らなかつたのみならず、却つて忠隣を德とし、江戸へ來る毎に、その家に宿泊した。

これでなければならぬ。血で血を洗ふやうな愚をしてはならぬ。

八の六　虎豹の子は未だ文を成さずと雖も已に牛を食ふの氣あり　（尸子）

一概にはいはれないが、古來、英雄、偉人の名のある人は、幼少の頃から、早く既に、他の頑童等と異なる所があつたやうである。

德川秀康は、家康の第二子である。一度、豐臣秀吉に養はれて、三河守に任じ、結城氏を冐したが、後ち復族し、正三位に叙し、權中納言に任じ、越前に封ぜられて、七十五萬石を領し、北庄城に住した。阿義丸の幼時から、小兒の戯れを嫌つて、武勇談を好み、聞く毎に、感嘆措かず、身、その境に蒞むが如くであつた。又た、人の節義を語る者があれば、耳を傾けて聽き、感極まつて、次ぐに涙を以てした。見る者は、

この子の前途を想ひやつたといふ。

小兒の小兒らしいのはよい。何時迄も小兒らしいのは、到底、凡物たるの證であらう。

八の七　大敵を見て勇む　（後漢書）

勇者は、恐れない。恐れるならば、小敵を恐れて、大敵を恐れない。

會津の役、家康は、一人を留めて、上杉景勝に當らしめ、その身は、石田三成と戰ふべく、西に向はんとして、命を秀康に下した。秀康は、『勝敗は、必らずしも、勢ひの多少によらぬ、と承はりまする。秀康儀は、まだ、戰に習ひませぬけれど、景勝一人を相手に戰ふには足りませう。大將をさへお免し下されまするなら、御辭退は致しませぬ。』と、

健氣に答へた。家康は、落涙の体で、自ら、鎧一領、刀一口を取り出して、秀康に與へ、さて後ち、諸將を率ゐて、小山を發した。

秀康の如きは、眞の勇者といつてよい。

八の八　剛毅なる人は惡意を懷かないそして和議の成ると同時に戰爭の損害を忘れてしまふ　（クーパー）

戰勝者の弊は、その擧の猛暴殘忍に亘るに在る。眞の勇者でないのである。眞の勇者は、敵に對して、寛大なのを常とする。

秀康は、宇都宮に陣して、關東を鎮め、且つ、使ひを上杉氏に遣はして、戰ひを挑んだが、景勝は、

『人の不在に乘ぜぬが、謙信以來の家法でござる。』と答へて、應じなかつた。

やがて、西軍の敗報に接すると、景勝は、秀康に就いて降を請うた。秀康は、名家を滅すこと、心なき爲であるとして、爲めに家康に懇願しその容るゝ所となつた。景勝は、大に喜び、深く、秀康を德とした。

秀康の勇は、この寛大を待つて、益す光輝がある。偉なるかな！

八の九　貴くして賤しきに下れば衆惡まず

（韓詩外傳）

賤しい者には、訓ふといふ過ちがある。これ、恕してよい。貴い者には、驕るといふ失がある。これ、惡まざるを得ぬ。

慶長十年四月十六日、家康の嗣子秀忠に對して、將軍宣下があり、同

時に、秀康へも、正三位に叙し、權中納言に任ずるの恩命があつた。五月朔日、秀康は、伏見城に入つて、新將軍に謁し、賀詞を述べるのに、上杉景勝が、先任者であることを理由に、席次を讓つて、その下位に出やうとした。景勝も、亦た、切りに謙退した。兩々、相讓つて、時を移す程に、將軍の命があつて、秀康が、上位に直ることとなり、席次は、漸く決定した。

將軍の弟を以て、曩には德川氏に敵した一諸侯に下つた秀康の謙讓は、まことに貴い。

八の十　君子は義に喩り小人は利に喩る

（孔子）

そして、勇者は、勇に喩る。

我が邦女歌舞伎の祖と稱せらるゝ出雲のお國は、天正の前後に、その妙技を揮つた女である。伏見に在るの一日、秀康は、これをその旅館へ召した。時に、お國は、頸に水晶の珠數をかけてゐた。秀康は、

『不似合ぢや。』といつて、珊瑚の珠數を與へなどして、これを寵した。

やがて、お國は、起つて舞つた。羅衣、風に從ひ、長袖、交も横はつて、その宛轉の狀を極めるのを、ぢつと見てゐた秀康は、俄かに泣き出した。左右の者が、驚いて尋ねると、

『彼れは、女ながらも、既に、天下一の名がある。自分は、堂々たる一丈夫であるけれど、まだ、天下一といはれぬ。それが耻づかしい。』といつたとか。

これ、お國の技を見て、勇に喩つたのである。以て、秀康の勇を想ふ

ことが出來る。

因つて思ふに、物を見ること斯くの如くであるならば、物として、自分を勵まし、誡しめる材料でない物はない。萬物、皆、我が師である。たゞ漫然と看過してはならぬ。

八の十一　君子の過ちは日月の食の如し過つや人皆これを見る改むるや人皆これを仰ぐ　（子貢）

小人は、過ちを文る。文らず、蔽はず、八面玲瓏、人に與へて見せしむるのは、たゞ君子の事である。

秀康の近習朝日千助といふに、何か粗忽な行ひがあつた。秀康は、

『汝は、物の用に立つまじき者ぢや。』と叱つた。千助は、深く悲しんで

忽ち自殺した。秀康は、大に驚き、早速、その父丹波を呼んで、仔細を語り聞かせ、

『予の一言から、あたら、武士を失つた。何とも申譯がない。切めての事に、予の愛子國松を養つて、家を繼がせくれよ。』といつて、强ひて父子の約をさせた。

この事、易きに似て、實は難い。秀康が、君子の人であつたればこそである。

八の十二　勇にして禮なければ則はち亂る　（孔子）

勇にして禮なき者は、倫常を亂り、粗暴に失して、必らず世の指彈を受ける。人に恐れられることはあらう。敬はれることはない。眞の威嚴

は、たゞ、勇にして禮ある者のものである。

秀康が、病氣に罹ると、父家康は、命じて京都へ療養に行かせた。家康を出る時、家康は、

『玄關から、直ぐ乘物で……』と指圖し、さて、跡から人をつけさせると、その者の復命に、

『町から二三町も出離れて、乘物に召されました。』との事であつた。家康は、聞いて、

『我が子ながら、三河守の心底には、身の毛も樹立つ。』といつたとか。

家康をさへ憚からせた秀康の威嚴は、勇にして禮のあつた事に由來したのである。

八の十三　己れを責めて人を責めざれば怨むことなし

（伊藤仁齋）

反對に、人を責めて、己れを責めない所から、不平となり、不滿となり、人を怨むとなる。

京極高次は、若狹の外、越前敦賀郡を合せて、九萬三千石を領し、小濱城に住した。關ヶ原の役には、東軍に屬して、大津の城に籠り、西軍と戰つたが、長臣黑田伊豫守の敵と通ずるあり、已むなく敵の請ひを容れて、これと和し、高野山に去つた。役後、家康の召命があると、

『諸將、何れも大功のあつた中に、城一つを守り終せなんだ自分、世間へ出す顏がない。』といつて、應じなかつた。家康は、重ねて使者を送り

『若し出られずば、當方から行かう。然し、老人を煩はされるより、若役に……』といはせた。高次も、今は辭するに言葉なく、乃はち、山を下つた。

家康は、これと面接して、

『敵の大軍を、數日間も喰ひ止められた事、味方の爲めには、大助かりであつた。敵に請はれての和議は、耻づるに足らぬ。』とその功を賞め、近江四十萬石を與へやうとした。高次は、

『微功の某に、その御褒美では、關ヶ原の大功者たちには、百萬石も賜はりまするか。存じも寄りませぬ。』と固辭し、受けなかつた。

功がないのに、功があるとして伐る者の多い中に、功がありながら、功がないとして、自ら責め、高野入り迄した高次の如きは、希有であら

う。高次の心でゐたら、すべての場合に、人を怨む必要はあるまい。

八の十四　學んでこれを集め問うてこれを辨ず　（易經）

單に讀書の一事に就いても、多讀は、精讀に如かぬ。博くて淺いのは狹くて深いに如かぬ。多讀して而も精讀し、博くて而も深ければ、これに上越すことはあるまい。

戰國の諸將、博學洽聞、細川藤孝の如きはない。和歌は、最もその長技とした所で、歌道の蘊奥を究め、堂上、地下、及ぶ者なく、實に、松永貞徳の師である。二位法印に叙せられ、玄旨幽齋の名、斯道の宗師と仰がれた。

又た、禮法、古實に通じ、豊臣秀吉に仕へては、古法に據つて、内衆

の行儀を掟し、徳川家康に問はれては、悉く武家の儀式を傳授し、幕廷の禮節中には、藤孝の定めたものが多々あると聞く。

その他、茶道に善く、庖丁に善く、行くとして可ならざるなかつた上に、尙ほ、和漢の學に通じ、造詣する所、極めて深いものがあつた。嘗つての言葉に、

『學問は、博いがよい。乞食の頸にかけた袋のやうに、殘肴餘飯、何でもかでも貯へる。斯くてこそ、必要次第、取捨選擇して用ひることも出來るのぢや。』とあつた。蓋し、自ら語つたのである。

が、斯くの如きは、天分の饒かな藤孝のやうな人でなければ、能ふべくもない。我々常人に在つては、室鳩巣の語に、

書を讀むには、精覈ならんことを要す。多きを要せず。一寸の鐵も

鍛ふれば、能く人を殺す。三尺の劍も、鈍なれば、人を傷つくること能はず。

とあるのを法として、間違ひはあるまい。

八の十五　水清ければ大魚なし（班超）

下を遇するのに、寛嚴宜しきを得ることが出來なければ、寛に失した方がよい。嚴に過ぎ、規則を繁瑣にして、下に些かの失があつても、これを叱責し、これを呵責し、決して寛恕しない、といふやうな遣り方は、下を服する所以ではない。班超の所謂る、「水清ければ、大魚なし。」の理で、下の心を失ふに終ること必定である。

藤孝は、性質の温和な、慈恵深い人で、居間近くで、年の若い小姓たちが、どんなに戯け騒いでも、曾つて咎めることをしなかつた。叱る者があると、

『武家に仕へる者は、今にも事があれば、忽ち命を失ふのぢや。子供が騒ぐからといつて、可哀さうに、その様に叱言をいふものではない。』と制するのを常とした。であるから、下の者は、何れも藤孝を德とし、親以上にあり難がり、縱し、他にどんな好い事があらうとも、この家を出て、それへ走らうなど思ふ者は、一人もなかつたといふ。

藤孝は、或ひは寛に失したかも知れぬ。けれど、寛に失したればこそ能く、下の心を得たのである。嚴に失して、下の心を失ふのと、得失如何？　人に長たる者は、思はなければならぬ。

而も、下を遇するの道は、又た、人に交はるの道であることを記せな